

中国における気功活動の展開と 法輪功事件

浜 勝彦

- 1 はじめに
- 2 「三不」方針と気功ブーム
- 3 法輪功事件と中国共産党

1 はじめに

1999年4月25日の法輪功学習者1万人以上による中南海包囲事件は、中国共産党指導部に大きな衝撃を与えた。中国共産党は、この事件は1989年の「六四」天安門事件以来の最も重大な事件であり、国内外の敵対勢力と共産党が大衆を争奪し、陣地を争奪する政治闘争に他ならない、として法輪功に対する暴露、批判、取締りに乗り出した。

この過程で、これまではっきりしていなかった法輪功の教義と組織の実態がはじめて明らかになってきた。そして、市場経済化の中で多様化してきた大衆の価値観に関する要求に中国共産党の思想文化政策が応え得ていないという問題点が浮かび上がってきた。

これまで明らかになった法輪功の気功と教義における特色としては、①気功の簡便化された内容、②科学的用語による説明、③法輪という自動化されたメカニズム、④教義の道徳的性格、及び⑤色濃い宗教的性格をあげる事ができる。

こうした性格についてはさまざまな評価が可能であるが、重要な事実は、

法輪功が中国における1980年代後半から90年代前半の気功ブームの中から出てきたものであって、後から登場したメリットを生かして、このブームで登場した多くの気功のエッセンスを十分に吸収していると考えられる事である。特に①、②と④の性格はブーム期の多くの気功流派に見られた特色であり、③と⑤が法輪功の際立った特異性を示すものである。

そして、今回の法輪功批判の過程で、1980年代以来の気功活動の発展において、特異機能すなわち超能力の評価をめぐる中国共産党内で激しい論争が行われてきた事情も明らかになってきた。その中で「三不」政策が生まれ、気功ブームが生じてきたのである。

本稿では、こうした観点から、明らかになってきた気功をめぐる中国共産党内での論争と著名気功師達の活動を簡単に概観する事によって、法輪功の気功の特色と教義の特殊なあり方を浮かび上がらせるように務めた。⁽¹⁾今後解明が待たれる、気功自体の発展、中国の改革過程での大衆的価値観の変化と宗教との関係、大脳、精神と物質との関係の深層、等の研究にさらに多くの研究者が参入するように期待したい。

2 「三不」方針と気功ブーム

(1) 建国後の気功普及活動

建国後中国の気功の普及では、北戴河において1956年に国営の気功療養院が創設された意義が大きいとされる。この療養院の院長が劉貴珍であった。

劉貴珍は、河北威県大寺荘の人で、1920年に生まれ、1945年に革命に参加した。1956年から北戴河気功療養院の院長となり、1984年12月27日に死去した。

劉貴珍は、重い胃潰瘍になり痛くて眠れず、紹介を受けて解放区の農民気功師劉渡舟から内養功を教えてもらい、まじめに練習して102日で胃潰瘍が

直った。この方法を知人に教えたところ有効で、河北省邢台地区党委員会、唐山市党委員会、河北省衛生庁の高い評価を得た。省衛生庁は劉の気功について、中央の衛生部に報告し、1955年12月19日に、中国中医研究院成立大会で劉は気功普及の功績で表彰された。有名になった劉貴珍は全国で研修を行い、最初の気功ブームが生じた。

1956年に、国が投資して党首脳の避暑地である北戴河に最初の気功療養院が設立されて、劉貴珍が最初の院長となった。同年劉少奇が北京に呼んで気功の教授と報告をさせ、高い評価を行った。これ以降、陳毅、林伯渠、謝覺哉らの指導者が気功を習って効果がよく、ますます評価が高まり、彼の『気功療法実践』は11刷100万部売れ、各国語に翻訳された。⁽²⁾

文化大革命では批判闘争を受けこれが劉貴珍の早逝の原因となったと見られている。⁽³⁾ 劉貴珍の功績は、『気功療法実践』の中で中国の伝統的な養生法、心身鍛錬法である、導引、吐納、行基、服氣、坐忘、守神、煉丹、座禅、等々を、気功という名称に統一したことにあり、その後の普及に大きく貢献したとされる。

しかし、劉貴珍によって気功という名称に整理された結果、「氣」が呼吸法に限定され、広くても「内氣」「正氣」「元氣」という事になり、「入靜」という本筋が見失われがちになった。そして後に「内氣外放」が注目され、外氣の一人歩き現象を引き起こした、とその限界を指摘するものもある。⁽⁴⁾

（2）80年代の気功ブームの概観

1) 気功ブームの到来

第2の気功ブームは1987年から始まった。この年6月から人体特異機能の研究、管理を担当する「四人小組」弁公室で仕事をするようになった申潭によれば、ブームの実態は次のようなものであった。⁽⁵⁾

気功ブームは、気功活動参加人口にも示されており、1988年には大体

年表 1 建国後中国の気功活動略年表

-
- 1955 中国中医研究院成立大会で、劉貴珍が気功普及で表彰される。
- 1956 北戴河に国立気功療養院設立。劉貴珍が院長に任命さる。
- 1979 3. 11 『四川日報』が「大足県で耳で字がわかる児童を発見」との記事を掲載。
- 1980 2月 上海で第1回人体特異功能研究会開催。
- 1981 5月 中国人体科学研究会準備委員会成立。
- 8月 于光遠が特異功能の宣伝に反対する活動を開始。
- 1982 3月 国防科学技術委員会副主任張震寰が、張宝勝の特殊識字能力の実演を組織。
- 3月 中共中央の「我国社会主義時期の宗教活動に関する基本觀點及び基本政策」発表。
6. 25 中共中央宣伝部の通知、人体特異功能については、宣伝せず、批判せず、論争せず、という「三不」方針を示す。
- 1986 4月 中国気功科学研究会が成立。
- 1987 5. 3 中国人体科学学会正式成立。
- 8月 張宏堡が中華養生益智功（中功）の普及を開始。
- 9月 嚴新と清華大学の気功外気で核酸構造を変化させた実験がマスコミの話題になる。
- 1988 3月 国家科学技術委員会、中央宣伝部等が「気功の社会活動と宣伝報道工作に関する通知」を出す。
5. 8 田瑞生が、香功（中国仏法芳香型智悟気功）の初級、中級功の普及を開始。
- 6月 四川省成都の方宗驊が政府から副主任医師級高級気功師に認定される。
- 1990 12月 張香玉が逮捕され、中国気功科学研究会の特約会員の資格が取り消される。
- 1992 5月 李洪志が長春で法輪功の普及を開始。
- 1994 12. 5 中共中央、國務院が「科学技術普及工作の強化に関する若干の意見」を出す。
- 1995 5月 全国科学技術大会開催。偽人体科学、偽気功、所謂人体特異功能への批判高まる。
- 1996 10月 北京市中級法院が、沈昌の『工人日報』に対する名誉毀損での告訴を却下。
- 11月 中国気功科学研究会が、法輪功の直屬功法登録を取り消す。
- 1997 7. 23 胡万林が西安市長安県に終南山医院を開業。
- 1999 1月 胡万林に逮捕状執行。12月商丘市中級法院で公判開始。
4. 25 法輪功学習者による中南海包囲事件。
10. 30 全人代常委が「邪教組織の取締り、邪教活動の防止と処罰に関する決定」を採択。
-

6000万人、90年代半ばでは約2億人と見られていた。⁽⁶⁾

申漳によれば、気功ブームをもたらした一つの重要な要因として、気功師、研究者、老幹部、マスコミの密接な協力関係があり、その具体例は、嚴新、陸祖隱、張震寰、明真の間に見られたという。1987年にある新聞が一面で、嚴新が清華大学で外気実験を行って重大な突破を勝ち取ったと報道。夏には陸祖隱が興城で開かれた全国気功科学学術会議で嚴新の気功科学実験の報告を行い、ちょうどこの時嚴新自身は、先ず遼寧で、さらに北京、内蒙古、広東等で気功実演報告を行った。各单位は争って嚴新を招いて報告を求めた。各新聞雑誌は気功の医療奇跡と科学実験の奇跡を大いに報道し、宣伝した。嚴新ブームと気功ブームは双子のようなものであったという。

気功ブームは同時に人体特異機能（超能力）の宣伝に機会を与える事になった。嚴新は気功の宣伝を行う時に、特異機能の宣伝を大に行った。気功、特に高級気功は特異機能と密接に関連し、厳格に区別する事が難しかった。気功ブームは特異機能の宣伝にチャンスと条件を創造したのである。

1987年末には、批判派の『科技日報』が次のような事例を整理した二つの内部報告を作った。一つは嚴新の気功実演報告に関する内蒙古の軍幹部の手紙で、一万人近くが大師（嚴新）の指示で座禅入静し、あたかも仏教徒が敬虔に活仏の布道講經を受けているかのようであり、これは気功講演の範囲を大きく逸脱し、特異機能を際限なく拡大し、色濃い迷信の色彩に覆われている、とした。もう一つは新聞雑誌の気功と特異機能の報道の摘要であった。

『中国青年』は、気功師の趙学忠が気功で特異機能を開発し、台湾から来たある人を見て、奥さんに婦人科の病があると言い、またある人の写真を見てこの人は、高血圧、動脈硬化で、腎臓が悪いと言ったと報道した。『中国気功』は、嚴新がある老将軍の女の子に冷水を飲ませて、将軍の奥さんの高血圧昏迷症を治したと報道した。『南風』は、張延生は遙感で病気を診断し、『周易』の卦により予測が出来る、と報道し、張宝勝は念力で50kgの砂糖

を運び、封をしたピンから丸薬を転げ落させ、破いた名刺を復元できる等と報道した、等々。

1988年の『光明日報』の内部刊行物は、ある気功組織の責任者が、無錫で報告を行って次のように述べたと伝えた。気功師の発する功は、外星人が操縦しているもので、女媧は外星人で、言われたところの神仙、祭られた菩薩、大仏は正真正銘の外星人である。地球は正に破滅に向かって加速しており、地球人は宇宙トンネルで他の星に移る事になるが、地球に12あるトンネルの一つが青海にある、と。こうした内部刊行物の高級幹部への影響には無視できない大きいものがあったという。

2) 気功の社会活動と宣伝報道工作に関する通知

「宣伝せず、批判せず、論争せず」の「三不」方針を実行する立場にある、特異功能研究の管理を行う「四人小組」は、社会に現れたこうした現象に対処するため、各方面に働きかけた。1988年3月に、国家科学技術委員会、中央宣伝部、中国科学技術協会の連名で、「気功の社会活動と宣伝報道工作に関する通知」が出された。

この「通知」は、気功師の勝手な解釈や誇大宣伝、大規模な気功実演講演会に注意を促し、気功研究と発掘は科学と迷信を区別し、宣伝報道部門は科学性と真実性に注意し、「特異功能」現象に対しては、一般に宣伝報道せず、ニュースの発表に当たっては許可を求めなければならない、とした。

この通知後、厳新の大型気功実演報告は行われなくなり、神効奇跡の類の報道はなくなったが、しばらくしてこの「通知」はなかったかのごとく、気功ブームはゆっくり元に戻った。厳新はアメリカに行き戻らなかったが、多くの気功師が後を継ぎ、気功活動の発展に伴って、宣伝すべきでない宗教活動、迷信等も発展してきた。

四人小組は、権力機構ではなく調整機構であって、実権がなく、また1989年末から1970年はじめにかけて、重要メンバーである伍紹祖と国家科

学技術委員会の郭主任の任務に変動が生じたため、業務停止状態に陥り、「通知」の実行に干渉する組織がなくなった。

中国気功科学研究会理事長で、中国人体科学学会理事長である張震寰は、かつて中国の原爆と電子計算機の開発を指揮した人物であるが、気功と特異機能はまだ国家の承認を得ておらず、研究経費が出ず、批判反対する人がおり、多くの高いレベルの気功師がまだ「山から下り」ていないとして、気功ブームの熱を冷ますべきではないという考え方であり、「通知」を自分の意見を聞かずに出したと、四人小組弁公室の申漳に怒りをぶっつけ、その後両者の関係が気まずくなったという。

3) 気功ブームの全面開花

「通知」は気功師達を拘束するものにはならず、多くの気功師たちは、気功伝授、研修、実技報告、病氣治療等の形式でかなりの収入を得ることが出来た。彼等は公職を辞めた。こうして、彼等は戸籍、賃金、行政の上下関係、党の規律等何らの拘束も受けず、組織管理の拘束も受けずに済み、市場さえあれば大変うまく行った。一定以上の能力のある気功師にとって、市場は確かに際限なく大きかった。彼等は万人以上の「四人小組」を騒がせるような大型実演講演会はやらなかったが、千人規模の実演講演会を数百回、数千回とやる事が出来、誰もこれにブレーキをかけるものがいなかった。

厳新の後には、張宏堡、張香玉、張小平、沈昌、狄玉騎、陳林峰、張致祥、田瑞生、李洪志等の「気功大師」が続々と現れて、それぞれ二、三年世の中を騒がせた。その内の何人かは、自己造神能力は厳新に劣らなかったが、その他の面での品格は、はるかに厳新に及ばなかった。一部の人々は、まったく気功事業の発展のために気功の科学実験を行うのではなく、きちがいじみて金儲けを図り、迷信を宣伝し、名を騙り、利を騙り、色を騙り、財を騙った。張香玉、張小平は、気功界の「ならず者」であるという。

(3) 人体特異功能、人体科学研究の推進

1) 人体特異功能研究の開始

1980年代末の気功ブームは、1978年末の中共11期3中総会で改革・開放の時代に入って以来の人体特異功能研究の開始、それを拡大した人体科学研究の展開の積み重ねの中で開花してきたものである。

1979年3月11日、『四川日報』は、「大足県で耳で字がわかる児童を発見」という記事を載せ、12歳で小学5年生の唐雨が耳で字が読める事が判明し、科学研究部門で研究を進めている、と報道した。4月に入って安徽省で女子中学生胡聯、北京では、女子小学生姜燕、さらに11歳と13歳の姉妹王斌と王強、河北省淪県の女子中学生于瑞華、等の耳で字が読める児童生徒が発見された。

これまでの常識に反する発見であるため、四川医学院が調査を行った結果、ほとんどが盗み読みによる事がわかった。姜燕についても同様とわかった。

5月には2回『人民日報』が批判を行い、ある部門は耳で字を読む現象の宣伝は科学に違反し、封建迷信を復活するものだという文書を通達し、『四川日報』は自己批判し、四川省委員会書記の楊超は迫られて検討を行った。

1978年5月に上海で創刊された『自然』雑誌の編集委員兼記者である、朱潤龍、朱怡怡は、7月に北京に来て王斌、王強に会って、識字能力を確認し、『自然』雑誌に非眼感知、人体感知等の用語で一連の実験結果を発表した。

1980年2月に『自然』雑誌編集部が主宰して上海で第1回人体特異功能討論会が開かれた。ここには前述の児童を含む13人の特異功能児童と1人の特異功能成人が招かれて、各種実験を行い、『自然』雑誌は、この会議で真偽論争は特異能力の存在を確認して結論が出、人体特異功能の研究は新しい段階に入った、とした。⁽⁷⁾

2) 人体科学研究の推進

1981年5月、重慶で第2回人体特異機能討論会が開かれた。この会議は四川省委員会書記の楊超が開幕式を主宰し、中国科学技術協会書記の聶春栄が会議に出席し、著名な科学者銭学森、貝時璋、王淦昌、趙忠堯等が、祝賀の手紙と電報を送り、会議の重要度が大いに高まった。

この会議では、中国人体科学研究会準備委員会が設立された。銭学森は、米MIT教授で、建国後国に戻り、中国のロケット開発を指揮した。この頃は国防科学技術委員会副主任、中国科学技術協会主席、全国政協副主席で、1980年から『自然』雑誌に寄稿し、人体特異効能というこの未知の領域の研究を支持した。1981年初めに銭学森は『自然』雑誌で、人体科学という概念を提起した。人体科学は、特異効能、気功、中国医学の三方面を含むもので、気功の外気、中国医学の経絡などの未知の領域を研究しようとするものであった。

1981年11月、中国人体科学研究会準備委員会は上海で第2回全体会議を開いて、人体特異効能研究が批判に直面しているので、国家科学技術委員会に公開測定検定を組織するよう要望した。返答がないので、同準備委員会は、82年4月にいくつかの大学と研究所に呼びかけて合同測定検定を組織した。27の研究単位から40名の専門家が参加して、3ヶ月の間検定測定を行った。

遼寧省本溪市の工場に勤める張宝勝は、偶然鼻で字を判別できる事がわかり、1980年6月に市の科学技術協会が測定を行ってその能力を確認し、北京に招かれた。1982年3月には、国防科学技術協会副主任の張震寰が張宝勝の特殊識字能力の実演を組織した。この実演には、国防科学技術委員会副局長である伍紹祖が招かれており、彼は人体特異効能研究支持派になった。伍は当時の党主席である胡耀邦の共産主義青年団中央第1書記時代の部下であったため、後述のように党中央委員会の4月6月にかけての「三不」方針決定に大きな影響を与える事になった。

張宝勝は、さらに5月には葉劍英元帥の家で実演を行い成功を収め、張宝勝は宇宙生理学研究所（507研究所）に所属して国防的観点から秘密裏に実験に参加する事になった。⁽⁸⁾

3) 于光遠の批判

于光遠は、1981年8月、すなわち第2回人体特異効能討論会が閉幕してしばらく後から1982年末まで、『哲学研究』『中国社会科学』『科学報』『知識就是力量』『自然弁証法通訊』『1982年中国哲学年鑑』等の刊行物に10余編の特異効能批判論文を発表した。後にこれらをまとめて1996年11月に知識出版社から『評所謂人体特異効能』という本を出版している。

于光遠は、著名な哲学者、経済学者で、中央宣伝部の科学処処長をやった事があり、この当時は、国家科学技術委員会副主任（1979～82年）、中国社会科学院副院長であった。彼は、エンゲルスの『自然弁証法』の専門家であり権威で、以前「自然弁証法研究会」主要責任者であり、特異効能研究批判の提唱者であった。

于光遠は、唐雨、姜燕等に対する実験は正確におこなわれたが、『自然』雑誌等の新聞雑誌の特異機能を肯定した測定試験は信頼できないとした。彼は、哲学の高度から特異効能の実験を信じる人は経験主義だと批判した。彼は、「耳で字がわかる」ような状況は科学において根本的に存在し得ないことであり、理論の考察でこれを根本的に否定する事が出来、まったく実験で証明する必要がないとした。

于光遠は、特異効能の研究を批判する事は大いに必要だと考えた。人体特異機能の研究はすなわち、建国前の霊学の変種であり、霊学は偽科学である。彼は、人体特異効能に関する宣伝は思想の混乱をもたらしており、これは「科学かそれとも偽科学か」「唯物論、マルクス主義か、それとも唯心主義、マルクス主義と根本的に対立する哲学か」の問題であるとした。⁽⁹⁾

4) 人体特異功能研究管理グループ

①「3人小組」

伍紹祖は、1964年清華大学工程物理学部卒で、理論核物理の大学院に入っていたが、途中で共産主義青年団中央に入り、全国学連で主席となった。「文化大革命」中は王震副総理秘書を勤め、後に国防科学工業委員会に入って、参謀、副局長等を経て、1985年には政治委員を務めていた。張震寰將軍はこの頃退官して民間人であったが、伍紹祖は現役高級幹部であり、論議の多い特異効能研究を上部の認可の下に推進する立場にあった。

伍紹祖は、中央宣伝部と国家安全部の二人と合同で上層部に手紙を書き、特異効能の科学上の意義、および国防と安全の面での可能な応用価値を述べ、3人でグループを作り、特異効能研究及び政策と管理の責任を負う事を申し出た。この件は党中央責任者の同意を得て「3人小組」が成立した。張宝勝を代表とする特異効能研究は秘密裏に推進する事が確定し、張宝勝は伍紹祖の指導の下に507研究所に在籍することになった⁽¹⁰⁾。

②「4人小組」

1987年に、国家科学技術委員会の郭副主任が加わって「4人小組」となった。

この年、507研究所の一部の研究員が国务院の科学技術指導小組に手紙を書いて、特異効能研究の重要性を述べ、国家ハイテク技術発展長期計画、すなわち863計画に入れるよう要望した。郭副主任はこれに理解を示して独自に予備調査を進めていたので、「3人小組」は郭副主任を加えて拡大する事としたのである。

「4人小組」が進めた仕事としては、弁公室を作ったことと専門家グループを作ったことである。国家計画に入れる前に若干の科研費が得られたので、1件3万元以下の科研費を十余の人体科学研究課題に提供した⁽¹¹⁾。

③「6人小組」

1989年には、伍紹祖が国家体育運動委員会主任に転じ、1990はじめには郭副主任が転勤になったため、「4人小組」の活動が停止した。夏に4人が連名で事業の継続を上申し、12月には「6人小組」発足した。伍紹祖が組長で、成員には衛生部の陳部長、国家科学技術委員会の李副主任、中央宣伝部責任者、等6人からなっていた。

1991年2月に第1回会議が開かれた。内容は四つの強化で、指導の強化、管理の強化、事務機構の強化、科研の強化であった。「6人小組」は、成員の変動で、後に人体科学工作組と改称した。伍紹祖組長が国家体育運動委員会主任となったため、人体科学工作弁公室は体育運動委員会武術研究院に置かれ、同院院長が弁公室主任を兼任した。

1995年5月から人体科学の断固たる反対者が、人体科学を偽科学として攻撃し、断罪しようとした。伍紹祖は上層指導部に自分の観点を上申し、このために、10月には不適當な批判が中止され、年末には人体科学の仕事が再び肯定されるようになったという⁽¹²⁾。

(4) 大論争と「三不」方針の形成過程

1) 于光遠による批判の実態

于光遠は、1996年に10年前の『評所謂特異效能』という本の改訂版を出したが、その序文で、自分の1981年当時の特異效能批判について次のように振りかえっている。

ここに収めた論述は遺憾な事に今日になっても時代遅れとなっていない。私が1981年にこの反科学の宣伝を必ず停止しなければならないと提起する前は、2年半の間、この偽科学は大手を振ってまかり通りこれを阻むものはなかった。科学の勢力と反科学勢力の最初の闘争に対して高い評価を行うべきだ。その結果の一つは胡耀邦同志が批示し、引き続き宣伝を許さず、きわ

めて少数の人だけが研究を続けて良いというものだった。しかし反科学の人物は、ある指導機構の支持を得て、ある著名な科学者の鼓吹とメディアの盲目的報道の下に、中央の同志の指示にかまわず、何はばかることなく大規模な宣伝と迷信組織と組んだ活動を行って、ますます活動がはげしくなり幾多の悪事を行い、今日のわが国社会生活のうれうべき事情をもたらしたのである。⁽¹³⁾

1981年から于光遠は、「この種の反科学の宣伝を止めるべきである」（1981年8月10日の講話）、「中国科学協会は“人体特異効能”に反対する態度を速やかに表明すべきである」（9月15日中国科協責任者への手紙）、「科学普及刊行物で鬼魂の宣伝を行う事は許されない」（同10月4日と28日）、「中国科学院は“人体特異効能”に反対すべきである」（3人への手紙11月4日）、「中国科協は正式に文書で“中国人体科学研究会”をまだ承認していないことを説明する事を望む」（中国科協責任者への手紙12月9日）と、連続して見解を発表した。1982年には「2年余来の“耳で字を読む”宣伝を評す」という長文の論文を発表した。⁽¹⁴⁾

2) 人体特異効能研究支持派の反撃

1982年当時の状況では、人体特異効能研究は党の旧来の方針に沿った于光遠のような権威のある人物の真っ向からの批判に直面したため、銭学森等の人々が敢然としてこの批判に対抗し、特異効能研究支持の旗印を敢然と掲げなければ、恐らく特異効能の研究は中国で夭折してしまったであろう、という。⁽¹⁵⁾

于光遠は、のちに特異効能研究、宣伝、管理に関する推進派と反対派の激しい攻防、「三不」方針の決定に至る過程について自分の観点から基本文書を紹介しながら整理した。⁽¹⁶⁾

本節では以下、この于光遠の整理にもとづいて、「三不」方針決定に至る経過を簡単に叙述しておきたい。

特異効能研究推進派は、于光遠の真っ向からの批判に直面してその対策を協議した。彼等の中の「策士」が、大丈夫、何とかして中央の責任のある同志が、于光遠が反対しているのはすでに学術問題ではなく政治問題なのだと信じるように仕向ければ良い、と言った。

この戦術は本当に効果を上げた。かれらは「中央の責任ある同志」のところに行って実演を行い、彼等に自分の目で「人体特異機能」を見せて彼等を騙し、「人体特異効能」が病気を治せると信じさせた。何人かの指導者は、人体特異機能を信じるようになり、直接間接にこの種の反科学の宣伝を支持するようになった。中央書記処書記兼中央宣伝部長（王任重）はその中の一人であった。それは一人に止まらなかった。特異効能宣伝者は、中央の責任者と一緒に写真を撮り、それを支持の証拠として見せて歩いた。

何人かの中央の同志の支持を勝ち取ってから、彼等は至るところで、実演、報告会、討論会を行い、研究会を成立させ、各地の新聞雑誌に人体特異機能を宣伝する報道や論文を載せ、出版社もこれに習った。こうして全国風靡といっても過言でない状況になった。

3) 両派の激突

当時党の科学工作は国家科学技術委員会が主管していた。国家科学技術委員会の何人かの副主任の内です光遠は自然弁証法の面の仕事を担当していた。于光遠の提案で、国家科学技術委員会の下に「人体特異効能問題調査研究連絡組」が組織され、ミニ機関紙を出し、会議を開き、文章を書いた。のちに1975年から1982年に至る両派の闘争をまとめて、1985年1月に「連絡組」は『人体特異効能争論始末』を出版している。

1981年末から82年初めにかけて対立は激烈になった。人体特異機能をやる勢力が攻勢をかけ、反科学の宣伝に反対する『中国青年報』や『人民日報』が攻撃を受けた。国家の科学工作を管理する二つの最高機関である科学技術委員会と国防科学技術委員会が対立する立場に立った。中国科学院の李昌も

反対派に立っていた。

この間于光遠は、多くの論文を書き、何回も各種の会合で話をした。張震寰は1982年2月6日に李昌に手紙を書き、李昌の態度に不同意を示した。彼は3月15日には于光遠にも批判の手紙を書いた。また4月5日には、心理学者の潘菽が于光遠の書いた文章を支持したというので潘菽に手紙を書いた。全国科学技術協会書記聶春栄と衛生部中医局の呂炳奎は1981年10月5日、王任重に手紙を書き、1982年3月25日には胡耀邦（党主席）に手紙を書き于光遠が人体特異機能を全面的に否定している事に抗議した。

『人民日報』が、中国科学院の1982年2月24日の報告会で中国科学院の党組書記の李昌と于光遠が行った講話を掲載し、さらに長い編者の言葉をつけた事に彼等は大いに不満で、党中央に問題を上げてきた。党中央委員会には1981年末か82年初めに思想工作小組が設置されていた。メンバーは7人で、序列順に、胡喬木、王任重、周揚、于光遠、朱穆之、華楠、及び鄧力群で、鄧力群は小組秘書であった。全国科協書記の聶春栄は、中央にこのような思想工作小組があると知って、『人民日報』の問題を訴え出た。

秘書の鄧力群は、「この件は思想工作小組で議論してはいかがか」とメンバーに聞いて回った。王任重は賛成、于光遠は「まじめに徹底的に議論すべきだ」と賛成した。胡喬木は、于光遠の性格を良く知っているので、議論すると、王任重との激しい論争になることを考えて、理由なしに「この件は議論しない事にしよう」と批示し、この訴えは取り上げられなくなった。

人体特異機能をやる一派では、今度は国防科学技術委員会の張震寰副主任が出てきて抗議を行った。3月5日に『人民日報』党組書記胡績偉あてに手紙を書き、これは、中央思想工作小組にも回ってきた⁽¹⁷⁾。

4) 胡耀邦の裁定をめぐるいきさつ

胡耀邦は、張震寰の手紙と、さらに胡績偉の手紙を読んで、張震寰の手紙に次のような批示を書いた。

「喬木、任重、方毅、力群同志に転送の事。この問題については、1979年の最初から疑いを持ち、3回批語を書いて、これはわれわれの科学研究の方向ではなく、新聞雑誌で紹介と宣伝をしてはならない、と提起した。一部では断定的なところがあったが、私の主張は根拠のあるものだった。後に私は管轄しなくなったが、新聞雑誌にかなり載った。今も私はこの二つの線を守るべきだと主張する。宣伝部門がやってもらいたい。4月10日」

ここにある3回の批語はどういうものかを探した于光遠は、二つを見つけた。何れも胡耀邦が中央宣伝部長の時期のもので、党の宣伝部門に向けたものである。

第1は、1979年4月24日に国家科学技術委員会と中国科学院の簡報『“耳で字を読む” 詐術を暴く』に批示したもので、このようなでたらめの笑い話があってはならないとした。

第2は、同年11月8日に、『北京の二人の小学生が耳と腋の下で字を読む事ができる』という文書に批示したもので、科学工作者が処理する問題だが、公開宣伝してはならない、とした。

于光遠の分析では、1982年4月10日の胡耀邦の批示は、前回二つの断固たる態度に対して、「一部断定的なところがあった」、「人体特異機能はわれわれの研究の方向ではない」としており、軟化が見られるという。

この胡耀邦の批示に基づいて、4月20日、党中央宣伝部は「新聞雑誌で人体特異機能を宣伝あるいは批判してはならない通知」を発出した。全文は以下の通り。

「ある時期から、一部新聞雑誌は“耳で字を読む” たぐいの宣伝を不断に行っている。同時に一部の新聞雑誌は、公開で論文を発表してこうした宣伝に批判を行っている。最近中央の何人かの指導的同志は以下の見解を示した。

“耳で字を読む” 類は、われわれの科学研究の方向ではなく、新聞雑誌で紹介と宣伝をしてはならず、また批判の文章とニュースを発表してはならない。

以上通知する。各地区、各部門は注意して管理する事。」

中国科学技術協会も、4月28日にほとんど同文の、「新聞雑誌で人体特異機能の宣伝または批判をしてはならないことに関する通知」を出した。

胡耀邦の批示になかった「批判してはならない」が付け加わった。こうした折衷妥協の通知に対して、論争の双方が何れも不満であった。まず、5月5日にある著名な科学者（銭学森をさす）が中央宣伝部副部長に手紙を出した。

中国科学技術協会の通知を見たが、これを下部で実行すれば、一撃で死んでしまう。上海の『自然』雑誌はいくつかの論文カットを命令された。党は議論のある科学研究をこのように処理して良いのか。モルガン遺伝学説、自動制御論、量子化学共振論、人工知能、さらに数量経済学、形象思維、などを批判した教訓が少なくないとも言えるのか。『自然』雑誌の論文掲載を禁止してはならない。

私は自分の党性にかけて、人体特異効能は真実で偽物でないことを保証する。トリック、人騙しもあるが、それは人体特異機能ではない。人体特異機能は気功と中医理論と密接に関連している。手紙には以上のように書かれてあった。

一方人体特異機能反対派も黙っておらず、科学技術委員会副主任呉明諭が5月18日、胡耀邦に手紙を書いた。

ここ2年間、所謂特異機能の反科学宣伝はきわめて悪い影響を与えている。実演に参加した児童の心身は傷を受けている。50分に編集した17人の“特異機能”児童の試験測定の録画を送りますから見ていただきたい。盗み見したもの以外は全部失敗した。党性のあるものは“子供を救え”の声に耳を傾けるべきだ。

あなたの指示はわれわれに非常に大きな鼓舞を与えるものですが、数日前に接した中央宣伝部の正式文書では、「また批判の文章とニュースを発表し

てはならない」とあり深く憂慮される。ここ2年来大規模におこなわれた宣伝を中央宣伝部は制止せず、今数編の批判文書が発表されるとブレーキをかける。これは、科学に対し、思想戦線におけるマルクス主義の地位を強化することに対してどんなメリットがあるのか。于光遠同志の連載中の論文は中断しなければならないのか。

中央宣伝部の通知は、たとえば、批判の文章は発表して良いが、厳格な科学的態度を要する、と言うように修正してはいかがか。呉明喩の手紙には以上のように書かれてあった。

さらに、于光遠は、銭学森の中央宣伝部のある指導者への手紙を見て、5月28日に胡耀邦宛てに手紙を書いた。この手紙は銭学森の論点を逐一論駁した長文のものであった。⁽¹⁸⁾

呉明喩、于光遠の手紙に対して胡耀邦の対応は示されなかったが、しばらくして『人体特異功能通讯』が胡耀邦の5月13日の批示を伝えた。それは以下のようなものであった。

「本報ニュース。中共中央主席胡耀邦同志は人体特異功能問題に対して批示を行った。批示の全文は以下の通りである。

これはわれわれの科学研究の方向ではない。そして、科学的にまだ充分に実証されていない前には、新聞雑誌は宣伝せず、紹介せず、また批判しない。この2か条は、私の見るところ、妥当で公正なものであり、断固としてこのように行うべきである。しかしごく少数の人が、引き続きこの問題を研究する事は許さるべきで、また彼らが小型の定期研究状況概況を出し、この方面に興味のある科学工作者に送付して閲読し、引き続き検討する事は許されるべきだ。」

この批示は、他の筋からは確認されておらず、于光遠は、銭学森の手紙に対して中央宣伝部の通知を擁護した性格のものと見ている。これに引き続いて、中央書記処の指示に基づいて、中央宣伝部は6月25日、もう一つの通

知を出した。全文以下の通り。

「各省、市、自治区党委宣传部、総政宣伝部、中央宣伝系統各单位党委、党組：

中央書記処の指示に基づいて、中央宣伝部は、最近人体特異功能の宣伝問題について議論した。いくつかの意見をあなたがたに指示するので、これにしたがって執行されたい：

1、人体特異功能はわれわれの研究の重点ではない。科学的に十分に証明される以前には今後新聞雑誌において、紹介と宣伝を行わなわず、また批判を進め、論争を組織してはならない。

2、これまで人体特異功能を支持し、または反対する文章を発表した事のある科学工作者に対して、批判と叱責をしてはならない。

3、今後、多くの人々が人体特異功能の試験を行う事をしてはならず、また宣伝を目的とした実演を行ってはならない。その観点を堅持する少数の人は、関係単位の責任管理の下に、引き続き研究を進めることが出来る。また彼らが研究状況を反映する材料をまとめ、この問題に興味のある科学工作者に送り閲読検討に供することも許される。

4、人体特異功能の研究、試験を行う科研人員と、虚偽を弄し、機を見てペテンをやる人物とを区別し、個別の虚偽を弄し、人の目を引きペテンをやり、やり方が悪劣で、ひどい結果をもたらす者には、適当な批判と処分を行って良い。

中共中央宣伝部」

中国科学技術協会も、11日後に同様な通知を出した。

ここでは、「科学的に十分に証明される以前には」とのべて、証明される可能性を認めている。また、新しく、「論争を組織してはならない」と規定し、ここに、「宣伝せず、批判せず、論争せず」という「三不」方針が決定

された事になる。

これで、人体特異機能問題に対する胡耀邦の処理は一段落し、その後この問題に干与する事はなかった。

以上の胡耀邦のこの問題に対する対処を解明した于光遠は、胡耀邦の真意と希望は、人体特異機能の反科学的宣伝を制限する事にあったと見るが、銭学森はもともとこの束縛を受けるつもりはなかったことは彼の手紙に示されていると見る。

そして、社会的にこの種の人体特異機能をやる人物は、大部分が渡世術士で、最初から党とはかかわりのない人達であったため、彼らはこの通知から束縛を受ける事はありませんでした。したがって、この通知発出後、人体特異機能を批判する人を縛る事になっただけで、反科学の宣伝がますます激烈になることは必然の結果であり、この事は以後の歴史が充分に示している事だ、という。

もう一つ于光遠が指摘している興味深い点は、当時哲学の論争が政治的団結を損なってはならないという配慮が存在したほかに、ある指導者の病状が悪化しており、偽気功への反対があまり先鋭になると、気功師が重病の指導者の治療をしなくなる点を考慮した、と述べている事である⁽¹⁹⁾。

この点から見ると、張震寰が、党元老達に気功師を会わせた戦術は大いに効を奏したのである。

(5) 気功活動の公認と偽科学批判

1) 気功活動公認の動き

1986年4月には政府公認の中国気功科学研究会が成立した。またこの年には、国務院学位委員会が初めて中国中医研究院に気功学学科を設立し、マスター研究生を募集養成する事を認可した。1987年5月3日には、1981年に準備委員会が設立されて長くかかったが、国家科学技術委員会の認可によ

り中国人体科学学会が正式に成立した。

1988年には、8月5日に四川省の気功医師の方宗驊が、初めて副教授級高級気功師に任命された。1989年年末には衛生部が正式に「医療気功管理条例」を公布して、医療としての気功が政府管理の下に組み込まれた。厳新によれば、これは気功が数千年来民間の範囲の限られた健身法、宮廷内の秘伝といった存在を脱して学問として、科学として公認された事を意味しているという。⁽²⁰⁾張震寰は、すでに定年退職しており、中国気功科学研究会、中国人体科学学会理事長としてかなり自由に活動する事が可能になった。

中国気功科学研究会が、全民健身計画要綱の実行に関連して1996年末に石家荘で行った初の気功大会には2400派の気功家が参加し、150余派の代表が演出を行った。⁽²¹⁾そのうち、中国気功科学研究会が直属功派と認定しているのは30から40程度と見られている。⁽²²⁾

2) 偽科学批判と気功活動への管理の強化

1988年にピークに達した形の気功ブームは、1990年代前半にも衰えることなく続いた。この中では、体制化した正統気功のほかに、気功の迷信化、宗教化の傾向と、気功の市場経済化の傾向が生じた。こうした弊害に対して、1990年代初めには「六四天安門事件」の余波で、さらに1992年には市場経済化ブームの到来で、中国共産党にはこうした気功の弊害に対処する余裕がなかったものと見られる。

1994年から、先ず世論を形成して徐々に気功活動に対する管理を強化する政策が展開されるようになった。1994年12月5日に出された中共中央、国務院の「科学技術普及工作の強化に関する若干の意見」には、近年「一部の地方では、求神拝廟、巫婆神漢、神怪洞府、葬儀の大盤振る舞い、迷信を持ち上げる、などの愚昧行為が頻々と発生している。科学の名を騙った偽科学、科学に反する詐欺行為が頭をもたげている」と情勢を認識し、「反科学、偽科学を打ち破ることの長期性、複雑性、困難性を十分に認識し、この仕事

を終始一貫堅持して行かなくてはならない。封建迷信を利用して違法犯罪活動を行うものに対しては、断固として法による打撃を与え、反動会道門組織に対しては断固法により取締り、封建迷信活動に参加した人には批判教育を進めなければならない。各級指導幹部は身をもって、現代科学文化知識、科学方法、科学思想の学習を自覚的に強化し、各種の反科学思潮の衝撃と影響に自覚的に反対抵抗し、封建迷信と偽科学活動は、これに参与し、これを奨励してはならない。党政幹部が参神拝廟、卦を求め占いをし、葬儀を大いにやる事を禁止し、好ましい社会風紀を打ち立てるために幹部が模範率先作用を起さなければならない⁽²³⁾とした。

この「若干の意見」発表以降、特に1995年5月の全国科学技术大会以降、このキャンペーンが本格化した。6月には、「科学精神を守り、迷信愚昧に反対する」組織委員会が成立し、9月には「科学精神を守り、迷信愚昧に反対する」シンポジウムが開かれた。

于光遠が再び登場して、「三偽一所謂」（偽人体科学、偽生命科学、偽気功、所謂人体特异功能）反对闘争とこの動きを概括した。これは彼の80年代の闘争の再開を意味していた⁽²⁴⁾。

今回の闘争では新しい偽科学、偽気功反对の活動家として、何祚庥、張洪林、司馬南等が現われた。龔育之の回顧によれば、今回の闘争では、戦線が広範で、暴露された偽科学案件としては、人工衛星の発射の成功を予測した気功大師（陳林峰）、「水を油に変える」詐欺案（王洪成）、「特异神秘功能」の「科学実験」（嚴新）が暴かれた。さらに「佛子」某（張小平）、「麒麟の化身」某（張宏堡）、「予測大師」某、作家某（柯雲路）、某の人体科技（沈昌）、現代神医某（胡万林）、『国際気功報』のでたらめな宣伝、等が暴かれたという⁽²⁵⁾。

人体科学研究推進派の申漳の回顧によれば、1995年5月から一部の人体科学に対する頑固な反対者は偽科学批判の名目で、めっちゃくちゃに人体科学

に不適當な批判をしかけ、人体科学を偽科学として断罪しようとした。一部のひと一部のマスコミは、大批判の方式をとって、人体科学にありもしない罪名を加えた。伍紹祖はこれに萎縮することなく、上層部が状況を諮問したときに自分の見解を文書で上申した。関係指導者は、まじめに伍紹祖の意見を聞き研究して、10月には不適當な大批判を制止して、年末には人体科学工作を再び肯定したという。⁽²⁶⁾

何祚庥は、1998年に『中国科学報』が今回の闘争で彼が連戦連勝したと述べたのに対して、よくてこれは局部の勝利だといった。例をあげれば、厳新が実演報告をやれば、1万人が集まり、省委員会書記が主宰するのに、何祚庥の報告は良くて1000人で、科協主席が主催する程度である。さらに柯雲路は十数冊の本を書いて、1冊数十万部から百万部出すというのに、何祚庥の主編した『偽科学曝光』は5000部に過ぎない。大衆生活への影響から見ると科学はまだ偽科学に勝っているとは言えない、という。⁽²⁷⁾

こうした状況の中で、気功団体への取締りも厳しくなり、1994年10月には民政部が「国際気功連合会」の解散を命じ、1996年11月、中国気功科学研究会は、法輪功が神学迷信を宣揚し、気功活動の趣旨から背理しているとして、法輪功の直属功法登録取り消しの決定を行った。気功科学研究会は、翌年11月にも同じ決定を変えないと再び宣告した。⁽²⁸⁾

（6）気功と宗教に関する規制

中国の現行の宗教政策は、1982年3月の中共中央の「我国社会主義時期の宗教問題に関する基本観点及び基本政策」によって規定されている。⁽²⁹⁾

基本原則は、以下の通り。「一切の宗教場所は政府宗教事務管理部門の行政指導の下に、宗教組織と宗教管理人員によって管理される。」「いかなる人も宗教場所に行って無神論の宣伝を行い、あるいは信徒大衆の中で有神あるいは無神の弁論を行ってはならない。しかしいかなる宗教組織と信徒も宗

教場所以外で有神論の布道、伝教、宣伝を行ってはならず、あるいは宗教ビラ及びその他政府関係部門の出版発行の批准を得ていない宗教書籍刊行物を配布してはならない。」

国家が承認している宗教組織は、プロテスタント、カトリック、仏教、イスラム教、道教である。この外は、すべて「迷信」あるいは部分的に「風俗習慣」にはいる。「迷信」は排除の対象であり法律保護に入らない。関連する風俗習慣は、大多数の状況下では、「迷信」の一種として対応されている。この1982年の「基本観点及び基本政策」では5種類の宗教があるとしているが、「宗教」と「迷信」に対してはさらに区別をしていない。

「すでに取締られた一切の反動会道門と神漢巫婆は一律に活動の回復を許さない。およそ妖言で大衆を惑わし、金を騙し取り人を惑わすものは、一律に厳しく取締り、法により逮捕する。党政機関幹部がこの類の違法活動を利用して財を集め利を上げるものは、一段と厳しく処置する。この外一切の観相、算命、風水を見る事を業とする人員は、彼らが労働で生き、自力で食べられるように教育、説得、援助すべきで、この類の人を騙す活動に再び従事してはならない。守らなければ法により取締るべきである。」

ある研究によれば、この文書は、当時重大な差し迫った宗教上の問題の解決において転換の歴史的働きをして宗教界内外の広い支持を得たものであるが、この後状況に比較的大きな変化が起こった。その内には、「宗教」の名義でなく、「宗教場所」以外のところで「有神論宣伝」活動をおこなうものがますます増えている。神漢巫婆の身分でなく内容は実質的に同じ事をする人とグループが大規模に出現している。しかもこうした本質的に宗教と迷信の宣伝が、ほとんど国家が批准した世論機関、新聞出版、ラジオテレビで行われている。こうしたグループは、国家機関、文化団体、大衆団体と直接間接に関係している。特に注目されるのは、こうした現象が、伝統「気功」および「人体特異功能」の看板の下に現れている事であるという。⁽³⁰⁾

（7）気功ブームの中の著名気功師達

1）方宗驊—公認気功医師

方宗驊は、中国道教全真太霊道第23代伝人で、四川省成都の草堂療養院（四川省第三人民医院）の気功医師、1988年6月には、副主任医師級高級気功師として認定された。政府が認定した高級気功師は、彼だけである。ここでは、中国で多数活躍する気功医師の代表として方宗驊の例を取り上げる。⁽³¹⁾

方宗驊が伝授している中華峨眉内功は、臨床に応用して20数年、好評を博しており、1986年に中国気功科学研究会は全国に重点普及する主要功法の一つと認定した。1989年に衛生部が主宰した世界医学気功学会では、中国で唯一人の気功医療専門家代表として出席、峨眉内功は国際伝統康復功法の模範とされた。中国気功科学研究会理事。

方宗驊は1945年8月8日江津市竜吟鎮に生まれる。幼名は毛弟。父は方銀海、母は袁中蓮（54年病死）。

1955年父は傅明清と再婚、明清の母周素清は巫婆で、黄蘗姑から峨眉玄門内功の功夫を習い巫医を秘密裏に行っていた。毛弟は7歳から周素清に功法を習う。9歳のとき、老ラマ僧がたずねて来て、3年間密宗黒教を習う。

1957年反右派闘争で、周素清は田舎に去り、毛弟は周の言いつけで劉栄章に密宗拳法などを習う。1960年から63年、毛弟は周素清のいる、貴州大婁山の麓の天堂村へ行き、3年間多くの功夫を習い、秘蔵の『神剣玄冥修仙秘訣』を伝授された。

1965年、江津長風機械工場に就職し、労働者となる。1967年より3年間元国民党軍官葉道正から多くの功夫を学ぶ。1969年5月名医羅海林に弟子入り。83年まで峨眉剣派真伝等多くの功夫を習う。

1970年代半ば、工場で気功学習班を組織。書記と労働組合がこれを支持した。1981年四川省労働組合系統気功教練訓練班総教練に任命され正式に峨眉内功を普及。

1983年四川草堂幹部療養院に「氣工」として勤務。同年冬羅海林が人に託して秘訣の宝、「車輪全息行動図総図」を正式に伝授。方宗驊は峨眉劍派第23代掌門となった。

1983年をはじめて済南での全国氣功功法経験交流会に参加。1986年6月元外交部長黃鎮、経済界の元老薄一波を治療。1991年4月軍事科学院政治委員王誠漢上將を治療。1993年5月泰国に行き、坤銀公主の治療を行う。1994年1月訪米。1994年4月米国医療代表团に参加したホフランド博士の父親の病気を言い当てる。

方宗驊は、自己の氣功の神秘化を図らず、公務員をやめて商売に転ずることもなく、宗教を始める事もなく、一人の医師として忙しい日々を送っている。

2) 張宝勝 — 国宝級氣功師

遼寧省本溪の人。1958年生まれ。一説では南京の人で中学の学歴、鉛鉍⁽³²⁾労働者。

1980年に偶然彼の勤める工場で、彼が鼻で字が読める事がわかり、工場で実験して確かだとわかった。6月には市の科協が測定試験を行ってこれを確認した。

1982年に人体科学に熱心な人の勧めで、北京に来た。彼の能力が強くて安定している事から、国防科工委副主任の張震寰等の重視するところとなり、3月に張副主任が主宰して実演が行われ、これを見た国防科委某局副局长伍紹祖が人体特異機能の疑問派から支持派に転じた。5月に葉劍英元帥の家で実演を行い高い評価を得た。⁽³³⁾

1983年6月2日、張宝勝は国防科学技術委員会所属の宇宙生理学研究所(507研究所)の職員となった。待遇は国家高級幹部級であった。張宝勝は氣功界の花形として、政府高級幹部、大学、芸能界、海外華僑の間で実演を行って好評を博した。

批判派による要約では、彼の特異効能は以下の通りであった。彼の得意技は、「気を発して」病気を治し、「意念」で物を移す事であった。彼はきわめて強い透視能力を持っていた。彼の目では人はみな「裸体人」であった。彼の第1の目は衣服を見通し、第2の目は皮と肉を見とおし、第3の目は五臓六腑を見とおせた。彼は「国宝級大師」ともてはやされたように、演出内容が新鮮で、展開が早く、神秘で計りがたく、人の目を惑乱させた。彼は「気を発して」人に痛いと言わせ、病人から「気」で腫瘤を取り除く事が出来た。彼は「意念」で「膿」を取り、骨をつないで、病気を排除できた。彼は人体の七経八脈を透視する事が出来た。彼は密輸の麻薬を透視し、川底に落ちた計器の位置を知る事が出来た。彼は密封した瓶の中から丸薬を転がり落とす事が出来た。彼は警察の時計を地下1尺に埋め、灰皿を人の腹にいれることが出来た。彼は念力でフォークとスプーンを曲げる事が出来た。彼は壁を通して身を隠し出入りできた。彼は噛み砕いた名刺を元に復元できた。彼は他人の金を自分の財布に入れることが出来た。彼はトランプを自分の意図どおりに出す事が出来た。彼は「気を発して」テレビ、レコーダー、ビデオカメラを修理できた。⁽³⁴⁾

『中国青年』誌1995年6号は、何祚庥、林自新、慶承瑞の書いた「“超人”張宝勝が敗走」と言う論文を掲載し、1988年5月21日に、これらの特異功能反対派の人々の前で薬瓶から丸薬を転げ落とさせる実験を行って失敗し、その他の実験でもトリックを使ったという事が暴露された。⁽³⁵⁾

当時この実験を組織した申漳によれば、事情は次のようなものであった。人体特異機能をめぐって当時科学技術委員会の中で郭副主任の肯定派と、呉明喩副主任、林自新秘書長兼『科技日報』社長の否定派があって、対立していた。林自新はアメリカからユリ・ゲラーのトリックを暴露したランディを中国に招いて調査を行わせた。伍紹祖は、機密保持のため、張宝勝に合わせず、低次元の気功師と合わせた。ランディは訪中報告で、特異功能の存在を

完全に否定した。そこでこのマイナスの影響を除くために4人小组は、反対派人士と奇術師を招いて張宝勝に得意の実演をさせることにした。実際に行われた日は5月13日金曜日であった。張宝勝は5時間を費やしたが指定実演に成功できず、非指定実演でもトリックが存在したと見られた。

申漳は、何祚庥等反対派は、一度の実験の失敗を大げさに取り上げて、人体特異功能研究、偽科学反対のキャンペーンに利用した、と非難している。⁽³⁶⁾

3) 張香玉—宇宙語と自然中心功

生年不詳、女性。中卒後北京のある工場で5年働き、1963年に退職して山西大同話劇団、河北張家口地区文工団で団員、1972年に青海省話劇団に入り、1989年5月繰上げ定年。

1986年に自費で北京に来て実演と病氣治療を行い、自ら「特異功能」があるとした。中国氣功科学研究会が関心を持ち、1987年に北京に招いて「考察」し、この年「特約会員」としたと見られる。1989年末には彼女が「自然中心功研究所」を設立する事を認可した。

1990年3月18日、北京北大平荘農貿市場付近の研究所で万人授講を行い、40分で一人35元。3月21日に公安局がこれを非合法として停止を命令。4月14日公安部門が張香玉の身柄を拘束、12月5日正式逮捕。12月11日中国氣功科学研究会は、研究所所長のポストから解任、特約会員の資格を取り消した。

「自然中心功」は「宇宙語」を語り、自然中心功修練により天目、眼功、耳功、嘴功が開くと説く。宇宙には炁という物質が存在して大自然と人体を相互に循環するとしており、これは氣に相当する。自然界には炁、信息、高級生命体＝人、が存在し、万物には靈があり、これが「附体」すると信息が傷つき病氣となる。治療は「附体」を駆除して大自然の協調を回復する事である。世紀末に中国はこの功によってのみ救われるとした。

1992年11月には公判が開かれたが、張香玉の行為は巫術なのか、人体科

学なのか法律規定をめぐって検察と弁護側が対立して、法規制の不備が浮か
び上がってきたとされる⁽³⁷⁾。

4) 嚴新一「現代の濟公」

四川省江油県の人、今年44歳。1977年に四川中医学院を卒業、四川綿陽
中医学校で教職につき、1982年に重慶中医学研究所診療所で医師となる。
2年経たないうちに封建迷信を行っているとして処方権を取り消され、各地
を放浪。次第に大気功師、超能力気功師として、名声が上がった⁽³⁸⁾。

1984年7月、『四川工人日報』が「神医、神話、現実」という長編報道を
行い、嚴新の名声は大いに高まった。「腫瘍がちょっとの間になくなった」
「粉碎性骨折が瞬時に治った」「国防科工委が嚴新を呼んで原水爆の父の癌
を治させた」「嚴大師は風と雨を呼べる」「2000キロの遠くから水の含有分
子構成を変えた」「2000キロの遠くから大興安嶺の火災を消した」といった
宣伝と報道が次々に現れた。

1986年には北京に招かれ、数ヶ月で、中央機関、兵營、一般庶民の人気
が高まり、患者が押し寄せた。四川で開発した気功実演報告会形式で遠隔治
療を行い報告会はいつも満員の盛況であった。同年11月に気功科学研究会
理事長張震寰が代表団を率いて日本を訪問したときは団員となり、日本の気
功師に勝ち、その報道が一層人気を高めた。さらに、86年12月から87年1
月にかけて、清華大学気功科研協力グループと嚴新が発した気で水道水等の
含有分子構成を変える実験を行い、錢学森がこれを科学革命の先触れと評価
し、結果が報道されて人気はさらに沸騰した。

しかし、清華大学科研処が正式実験と認めず、批判派の学者が実験の非科
学性を指摘して、科学界の公認は得られなかった。原水爆の父鄧稼先の癌が
治らず、大興安嶺の火災が消えず、「輝かしい業績」への疑惑と批判が高まっ
た。

嚴新はこの後、活動の舞台をアメリカに移した。1990年6月に初めて訪

米。1991年7月北米で国際厳新気功科学協会が成立、1993年11月APEC会議に民間人代表として参加、1995年6月イェール大学で初の厳新気功科学シンポジウムが開かれ、1996年7月27日ハーバード大学で「中国気功熱の啓示」と題する講演を行った。中国では、1994年4月1日に中共中央組織部で、97年1月には中共中央党校で講演を行った。

厳新が最近力を入れている研究は、第1に「辟穀」すなわち水以外は取らない断食で、6年半水だけで成長している女学生がいるという。また米国で700人が「辟穀」の実験を行い長い人は3年に及ぶが、しかし研究論文は食品関係業界の圧力で発表できない悩みがあるという。第2はアメリカから中国まで10000キロの長距離から気を発して物質構造を変化させる実験である。第3は気による遺伝因子転換の実験で、癌細胞の良性化、薬品会社での抗生物質生産等への応用である。

5) 張宏堡—中華養生益智功 (中功)

張宏堡は、ハルビンの人で、今年47歳。黒竜江省山河農場に下放され、黒河金鉱管理局勤務、北京鉄鋼学院経営管理学部幹部研修学校に派遣された。1987年8月に中華養生益智功の普及を開始した。彼は共産党員であるとい⁽³⁹⁾う。

張宏堡は、北京鉄鋼学院に気功研究会を作り理事長となり、先ず北京大学、清華大学、中国人民大学等17大学及び中国科学院の11の研究所に普及し、1988年1月10日には気功と超能力の報道を8年間避けてきた『人民日報』が「首都新聞界と文化界が“中華養生益智功”促成研修を行った」という報道を行い、各新聞がこれに習った。さらに外国と香港の報道が相次ぎ、「中功」学習熱が高まった。張宏堡はさらに公安、司法、検察人員の気功治療を無料で行い、公安部長等首脳の支持を集め、中央政界に影響を拡大した。

張宏堡は、現代知識人は忙しいので、古い気功のように「百日基礎」「十月懷妊」「三年哺乳」では間に合わないとして、15から18時間で、学習者

は採気、発気、自然換気、排病気、ができ、小周天速成法、麒麟顯聖六法、第一功である九妙法門を学べるとした。

組織建設では監督のゆるい会社機構設立から着手して、1988年10月7日には「中米合併」の「北京国際気功服务有限公司」を設立し、1990年には国際生命科学学院（四川青城山）と国際生命科技大学（重慶、同大学は『生命科学報』を創刊）を創建、北京海淀気功科学研究所と共に四大機構を形成した。

1992年には『麒麟文化』を創刊した。同誌によれば、「中功」はすでに5000のチェーン店を持ち、100近くの実業機構があり、3000万の修練者と弟子、18万の教員を擁していたという。研修には第一功から第四功まであり、第二功学習修了者は、老師謁見を経て始めて第三、第四功を修行でき、修了証、気功師証、直伝証を得て自分で弟子を取れる。

1991年2月には臧洪久を、92年9月には黄定栄を組織から追放した。95年2月に北京市中医管理局医政処安宝華処長、成都の科委幹部伍義江の妻への襲撃事件を引き起こした疑いがかけられている。偽気功暴露に力を入れる気功作家司馬南は、秘密結社の色彩を濃くしている中功組織の性格において建国前の宗教やくざ組織一貫道や日本のオウム真理教の姿を見ている。

香港の中国人権民主化運動センターによれば、中功は昨年10月、邪教と認定され、少なくとも幹部600人が拘束されており、今年3月13日、中功は全人代に同センターを通じて抗議の手紙を送り、中功への取締りの停止、拘束者の釈放を求めた。

6) 胡万林——「現代の華陀」

胡万林を全国的に著名にした柯雲路の『黄帝内経発見』上巻によると、その経歴は以下の通りである。胡万林は四川省綿陽市遊仙郷石板鎮劉家村の人で、1930年生まれ、今年70歳。小さな頃父母に捨てられて乞食となり盗みで暮らし追われて26年間山に入って野人のような生活をし、医者のところ

から『本草綱目』等を盗んで研究し、野草を噛んで試し、病人の治療をするようになった。1972年養母の家で「反革命の一貫道」とされて監獄に入れられ、1979年に情勢が変わって名誉を回復したが、1983年に家人の殺人犯罪の身代わりとして無期懲役刑となり、1989年には19年の有期懲役となった。1991年に四川省第三監獄から新疆和静県農2師勞改3支隊(223団)4中隊で服役、1993年2月から囚人と警察官の治療を始め、7月に気功中医診療所の看板を出した。⁽⁴⁰⁾

気功神医胡万林はだんだん有名になり全国から医者に見放された重症患者が押し寄せるようになった。1997年5月最高人民法院の指令で再審が行われて、綿陽市中級法院は胡万林の無罪を宣告した。胡は新疆から7月に初めて北京にやってきた。

これに対して司馬南等、胡万林の医療に対する批判暴露派は、四川省等での調査に基づいて、胡万林の誕生日は1949年12月12日で、今年51歳、彼は実の両親に育てられて、新疆に行くまでは村を離れた事はない、としている。

1997年7月23日に西安市長安県太乙宮鎮に終南山医院が開業した。郭周礼が会長、胡万林が院長、劉権壽が副院長であった。郭周礼と劉権壽は、西安市の『国際気功報』の社長と副社長で、これまで新疆での胡万林の医療活動を宣伝してきた。

9月から11月にかけて、終南山医院での死者の家族の騒ぎと内輪もめで胡は太原晋祠工人療養院に万林医院を開業。11月24日山西省衛生局が死者についての調査を開始したので西安に戻る。11月26日終南山医院再開。柯雲路が『黄帝内経発見』を出版、胡の「神医」としての名声が全国に伝わり、医院は患者であふれた。

1998年2月24日、北京の科学普及作家司馬南と中央テレビ局の記者が、終南山医院を取材中殴られ、不法に5時間監禁された。2月26日西安警察

が100輛のパトカーと1000人の警官で終南山医院を無免許不法営業他で取締り。胡院長は逃走した。

6月15日、河南省商丘市衛達医院で胡万林が試験診療を開始。9月26日、『中国気功科学』誌社長管謙、作家柯雲路が北京から商丘に来て胡万林の正式開業式典に参加。9月27日、漯河市市長劉法民が治療を受け死亡。さらに10月1日商丘市小学校教員何素雲が治療を受け死亡。同日胡万林は商丘から姿を消す。10月9日、胡万林は、管謙、柯雲路夫人と共に商丘にもどり、診療再開。10月16日、北京で「胡万林不法診療情報交流会」が開かれ、多くのマスコミが「科学が“胡大師”に宣戦」等のニュースを流す。17日警察監視下の胡万林は再び姿を消した。

12月9日、胡万林が上海に現れ、警察が拘束。その後商丘へ送致。1999年1月16日、胡万林は商丘で逮捕状を執行された。8月20日商丘市検察機関が胡万林を起訴、12月28日商丘市中級法院が胡万林の裁判を開始した。

7) 沈昌——信息茶と訴訟で有名に

沈昌は今年41歳、江蘇省啓東市聚陽郷の人。農家出身で祖父は陰陽師、祖母と母は巫婆であった。江蘇農学院南通分校専科に学び、この間気功を愛好した。⁽⁴¹⁾

1980年代末に突然悟りが開けたとし、「沈昌特功」の普及を開始した。その理論の第一は「辟穀」で、食物をとらなくても健康になる。第二に念力で農産物が増産できる。第三は「心誠なれば効く」意思決定論で、信者に絶対服従を要求して「沈昌信息」を受け入れれば病院に行くことはなく、正常だと唱えれば病気は治る、とした。90年代に入って蘇州に人体科技応用センターを設けて各地で沈昌印信息茶を売り出し、商売は好調であった。

1991年に上海で普及活動をしたところ、組織活動を禁止されたため、徐匯区と上海市の民生局を名誉毀損で告訴したが、93年4月16日に敗訴した。

1996年1月26日に『工人日報』が「沈昌のホラを聞いて」という記事を

掲載したのに対して、沈昌は北京市東城区人民法院に『工人日報』を名誉毀損で訴えた。『工人日報』は司馬南を被告代理人に指定した。9月4日以来『工人日報』社は100人近くの信者に包囲された。10月10日の公判は信者の集合で開廷できず、翌日に法廷は告訴却下の判決を下した。沈昌はこれを不服として北京市中級法院に上告したが98年4月23日に北京市第二中級法院は上告を棄却した。1997年には蘇州市物価局を訴えて12月に敗訴している。

8) 田瑞生——中国香功（旧名：中国仏法芳香型智悟氣功）

河南省洛陽の人で今年72歳。洛陽東郊外農村の貧しい家庭に生まれ、12歳のときに脱皮症となり苦しんだ。釈悟空大法師が田瑞生を尋ねてきて治療し功を授け、法名を釈迦開とした。50年功を練ればその後人に伝授して濟世活人しても良いと指示した。この功法は、仏教精化禪密宗の上乗功法に属し、2000年前に不恠大法師が創造し、「不立文字」の単伝で伝えられてきた。唐の玄奘、宋の道濟法師にも伝えられたとされる⁽⁴²⁾。

1988年5月8日に田瑞生は、「普渡衆生、濟世活人」のため初級、中級功法の公開普及を開始した。1993年9月の第1回中国香功幹部研修会での発表では、全国の修練者は2100万人で、40の国と地域に修練者がいるという。93年4月の首都体育館での1万8000人の実演報告会では、47人の足腰の障害者が歩き出し、21人のオシの子供が話を始めた。当日の収入40万元は中国オリンピック誘致委員会に寄付された。

香功の特色は、修練の中で香りを導きとし、笑顔が必須、田老師との「信息」交流が治病健身、啓智開悟をもたらすという点にあり、さらに意守、経絡を語らず、発気で人を治さず、集団修練を重視し、収功を重視する。初級、中級功では意念を語らないが高級功では意念力を語る。北京時間の22時から22時10分まで洛陽から「信息」が送られ、これを水に受け「信息水」とすることができる。理論ではなく修練中の悟りを重視し、徳の向上と自己修

練が功力の向上を支配するという。

3 法輪功事件と中国共産党

（1）法輪功事件の概要

1999年4月25日に法輪功という気功の学習者達1万人以上が、中国党政府の所在地である北京の中南海を包囲する静かな座り込みを行った。当日夜半に座り込みが解かれたが後にはゴミ一つ残っていなかったという。党政府側はこの闘争を予知できずその事自体が大きな衝撃となった。

大衆による党と政府への大規模な圧力活動は、文化大革命における紅衛兵運動、1989年の天安門事件に次ぐものであった。中国共産党は、「法輪功」事件は1989年の「六四」天安門事件以来の最も重大な政治事件であり、「法輪功」の誕生とその蔓延は、国内外の敵対勢力と共産党が大衆を争奪し、陣地を争奪する政治闘争に他ならない、との見解の下に、法輪功に対する暴露、批判、取締りに乗り出した⁽⁴⁸⁾。

法輪功の実態は、政府もよく掌握していなかったように、わかりにくいものであったが、この暴露、批判、取締りの展開によりその実態がおおよそ理解できるようになってきたといえる。

中国共産党の総力をあげた批判と取締りが行なわれ、法輪功組織は、少なくとも中国国内では、党と政府の強力な暴露、批判と教育、転化工作の効果が上って、ほとんど瓦解したものと評価される。

健康の為に、また良き道德の為に法輪功学習に参加した大多数の人々にとっては、徹底的暴露と批判により、その実態がはじめて明らかになり、創始者、教祖である李洪志と法輪功組織に対するこれまでの神秘性から来る魅力が削ぎ落とされてしまったものと見られる。

法輪功は、学習への参加と脱退が自由で、費用も安く、功法も平易で習い

易いと思われていた。経典と教祖の実像は学習者にはほとんど伝わっていなかったと見られる。これは、これまでの中国共産党の気功に関する「三不」方針に関連があった。「宣伝せず、批判せず、論争せず」という方針が80年代の気功及び超能力問題論争の中で形成された⁽⁴⁴⁾。この方針により、党側に対応の遅れが生じたものと見られる。

今回の徹底的暴露により、李洪志とその法輪功の全体像が知られるようになり、その神秘性から来るありがたみが失われた。しかし、李慎明社会科学院副院長によれば、改革開放の結果、また世界的現象としても、現在中国は思想文化の転型期に入っており、哲学、社会科学の対応が情勢について行けていない⁽⁴⁵⁾。こうした中で、中国共産党の世界観であるマルクス・レーニン主義の唯物弁証法が、大衆に受け入れられ易いものとなっていない、という現実がある。

したがって、依然として何かによって埋められなければならない思想文化の転型期における大衆的価値観の巨大な空間が残されているといえるのである。

(2) 法輪功の教義と教祖

『亞洲週刊』誌は法輪功の教義について次のように整理している⁽⁴⁶⁾。

李洪志が出版した小冊子の紹介によれば、法輪功はまたの名は法輪大法、法輪仏法である。それは「真、善、忍」を根本とし、その宇宙の最高特性を指導とし、宇宙の進化原理にしたがって大法、大道を修練するものである。

修練には修性と修命が含まれる。修性の主な方法は李洪志の『転法輪』等の書を読み、あらゆる執着心を捨てさることである。修命は5種類の功法の動作による修練である。修性と修命の結果、ひとつの「法輪」を練り出すことになる。これは霊性のある高エネルギーの物質体であり、修練者の小腹で日夜止まることなく回転する。宇宙からエネルギーを吸収して、修練者が、

練度をあげ、人を練るのを助ける。修練の最高位層は金剛不壊の身体を実現することである。

李洪志は著作の中で、現在は末法の時期であり、佛、法、僧いずれも用を成さなくなり、若干年後地球が爆発するが、ただ法輪大法を修練した人だけが救われ得る、と述べている。

また、その他の各種の解説によれば、法輪功の5セットの動作を修練する修命は、法輪大法の基礎であり、この基礎の上に天目が開き悟りの境地に至る向上の修性のプロセスがある。修性では執着心を捨てて真善忍の高い境地に至る心性の向上が基本となる。

これは何事も金次第の世の中で、法輪功修練者の道德的水準を高めるという事になり、法輪功修練者に優越感を持たせることになったものと見られる。

法輪功の気功としての大きな特色は簡易化して誰でも習いやすい動作であり、面倒な予備動作や収束功を必要としない。また、法輪が下腹部で自動的に気を練ってくれているので自己努力が大いに軽減される。師父の法身（仏の本性で、分身、拡大、縮少が自在）が保護してくれるので外邪の干渉を恐れる必要がない。安心して修練と向上に励む事が出来る事になる。

また、病気に関して、これは前世の業力を転換する過程であり、自己の修練によってこれを克服できる、としたので、高い医療費に悩む人々には福音となったといえる。

文革期に中学（高校）を卒業しただけの李洪志に3年間に10種類にも上る本を出す事が可能かという問題点が浮かび上がってきた。『転法輪』等の李洪志著の本は、実際上は人に頼んで代筆してもらったものであるという。⁽⁴⁷⁾

中国気功科学研究会の韓玉安の説明によれば、『中国法輪功』は、空軍指揮学院の于長新教授が執筆したものであろうという。当時の話では、于教授は半年間仏教関係の本を調べて書いたものと伝えられた。その出来は大変良く、于教授自身がその原稿を軍誼出版社に持ち込んで出版させたもので、出

版式にも于教授が出席している。また、中国広播電視出版社が『転法輪』を出版したのも、出版元の説明によると、すでに軍誼出版社から『中国法輪功』が出されていた実績があったからであるという。⁽⁴⁸⁾

(3) 法輪功組織拡大の過程

法輪功は、1992年に李洪志が社会への普及を開始したものである。

李洪志の略歴は、公安部の調べによれば次のようになっている。

1952年7月7日、吉林省公主嶺市に生まれる。1960年から1969年にかけて前後して長春市の珠江路小学校、第4中学、第48中学で学び中学（高校）を卒業した。1970年から1978年まで、前後して軍総後勤部201部隊81軍馬場、吉林省森林警察総隊文芸工作隊でラッパを吹いた。1978から1982まで森林警察総隊の宿泊所の従業員となった。1982年に転業して長春市糧油公司保衛科に勤務した。1991からポストだけ保留して「気功」活動に転じ、1992年5月から法輪功の普及を始めた。⁽⁴⁹⁾

1991年5月から9月まで、妹の李平のいるタイに滞在した。

1992年5月以降、普及を開始し、長春では、最初の法輪功研究会を組織し、自ら会長となり、副会長に4人の中国共産党員を任命した。長春、北京をはじめ多くの地方で、報告会、学習班、病気治療などを通じて普及活動を行った。8月には、中国気功科学研究会の低レベルの会員に登録された。12月には北京で開かれた第1回東方健康博覧会で、ブースを設けて法輪功を宣伝した。

1993年4月に『中国法輪功』を出版。8月に李洪志は、李昌、王治文、于長新らの人々と法輪功研究会を設立した。同月、中国気功科学研究会は法輪功を同会の「直属功法」と認定した。年末の第2回東方健康博覧会では、法輪功がただ一つ「辺縁科学進歩奨」を獲得、さらに特別金奨と「最も歓迎される気功師」の称号を獲得した。⁽⁵⁰⁾

1994年9月24日に李洪志は、長春市公安局緑園派出所で、出生日を変えて、誕生日を1952年7月7日から1951年5月13日とした。これは、この日が農曆4月8日に当たり、李洪志が「釈迦の生まれ変わり」であると宣伝するためであったと見られている。⁽⁵¹⁾

この年12月には経典である『転法輪』が出版された。この書物は1995年以降100万部以上販売された。毛毛著の『わが父鄧小平』を上回る売れ行きであったという。⁽⁵²⁾『中国法輪功』から『転法輪』への発展には、気功、病氣治療から、李洪志を教祖とする「法輪大法」練得への質的転換が反映されている。1993年夏から「大法」を説くという口実で、普及会でのこれまでの病氣治療儀式が取り消された。⁽⁵³⁾

1996年7月24日、政府の新聞出版署は、「『中国法輪功』など5種類の本を直ちに没収して販売禁止とする通知」を出し、さらに11月28日には中国気功科学研究会が、「法輪功の直屬功法の資格を取り消す事に関する決定」を下し、法輪功は、神学迷信をやっているとして普及の合法的根拠を奪ってしまった。⁽⁵⁴⁾

政府を代表して気功団体を管理する中国気功科学研究会の直屬功法となった1993年8月以来普及が順調に進展するようになったが、1996年以降は認可が取り消されたにもかかわらず、法輪功修練者は引き続き拡大していった。これは、3年の発展で李洪志のイメージと影響力が形成されたこと、各地の補導ステーションが独立して動けるようになったこと、法輪功宣伝の書籍、録音テープ、ビデオが用意されたためで、法輪功組織というこの巨大な法輪に自己回転の「第一推進力」がすでに与えられていたことを意味していたのである。⁽⁵⁵⁾

これ以降は、法輪功は、公認を求めて陳情すると同時に、非難攻撃に対しては、集合陳情などの行動を取る必要に迫られることになった。

法輪功筋の説明によると、中国で、法輪功はますます多くの人を修練に引

年表2 李洪志と法輪功事件関連略年表

1952年	7. 7	李洪志 吉林省公主嶺市に生まれる。69年中学卒業。
1970年		軍に入り、総後方勤務部201部隊「八一」軍馬飼育場。後に吉林省森林警察隊所属。
1982年		長春市糧油公司保安課勤務。
1988年		気功師の李衛東から「禪密功」を、気功師の于光生から「九宮八卦功」を習う。
1991年		職籍だけ保持して気功普及活動に乗り出す。
1992年	5月	長春で法輪功の普及を開始。
1993年		首都北京で法輪功を普及。4月『中国法輪功』を出版。
	8月	中国気功科学研究会が、法輪功を「直屬功法」と認定。
1994年	12月	経典『転法輪』を出版。
1996年	7. 24	国家新聞出版署が『転法輪』『中国法輪功』等の出版物を禁書とする。
	11. 28	中国気功科学研究会が法輪功の「直屬功法」の資格を取り消す。
1998年	年初	李洪志がニューヨークに居を定める。
	4月	法輪功学習者の山東省『齊魯晩報』社包囲事件。5月 北京テレビ包囲事件。
1999年		
	4. 19	天津師範大学で、法輪功学習者が『青少年科技博覧』の論文に抗議して座り込み開始。
	4. 22	李洪志アメリカから北京入り。24日香港へ。27日オーストラリアのブリスベンへ。
	4. 25	朝早くから、一万人を超える法輪功の学習者が中南海を包囲。
	4. 30	李洪志、シドニー入り。中南海事件への直接的関係を否定。
	6. 2	李洪志、「私の感想」を発表。
	6. 7	香港各紙、法輪功学習者集団が第二次示威行動に移ったと報道。
	7. 19	「中共中央の共産党員が『法輪大法』を修練してはならないことに関する通知」発出。
		同日夜から、20日未明にかけて、中国各地で法輪功幹部の一斉摘発が行われる。
	7. 22	中国民政部の「法輪大法研究会取締りに関する決定」。法輪功と李洪志一斉批判開始。
	7. 29	公安部が李洪志を国際指名手配。
	10. 30	全人代常委「邪教組織の取締り、邪教活動の防止と処罰に関する決定」。
	11. 12	海南省海口市中级人民法院が法輪功中核分子宋岳勝等4人に有期懲役刑を判決。
	12. 16	北京市第1中级人民法院は、法輪功中核分子である李昌、王治文、紀烈武、姚潔に対してそれぞれ18年以下の有期懲役判決を下す。

きつけており、主として、退職幹部、中老年知識分子、農民、都市住民である。わずか数年の間に、研究所、補導ステーションを網の目のように張り巡らして、1億人と称する膨大な修練人口を形成したという。公安部門は4000万人と推計しており、関係研究者の観察によればおおよそ8000万人で、年齢は3歳から80歳までいろいろで、中老年の女性が多いという。

法輪功の、中国以外の固定的修練の場所は、アメリカでは100を超え、カナダ43、台湾101、香港30、シンガポール40、オーストラリア60、ニュージーランド6、イギリス28となっており、その他数は不明だが、マレーシア、日本、タイ、ドイツ、フランス、スイス、スウェーデン、オーストリアにも固定的修練所が存在するという。

李洪志本人がアメリカに居を定めてから、北米地区での影響力は日々拡大している。アメリカの50州の内38州に、またカナダのオッタワ、トロント、バンクーバー、等の大都市にはいずれも法輪功のコーディネーターと補導員がおり、北米での法輪功修練者には高学歴の中国大陆からの訪問学者が多く、ニューヨーク地区コーディネーターの易蓉によれば、アメリカの法輪功信者の7～8割はアメリカでマスター、ドクターを取った人であるという⁽⁵⁶⁾。

中国当局の見方では、1999年7月22日の中国テレビの報道によると、李洪志を最高指導者とする法輪大法研究会がその基幹組織であり、その下に法輪功総支部（国内に39ヵ所）、同支部（同約1900ヵ所）、同修練所（同約2万8000ヵ所）、一般メンバー約200万人と、ピラミッド型の組織をなしているとされる。

（4）中南海包囲事件から批判・暴露・取締りへ

1）中南海包囲事件

1999年4月19日、天津師範大学で、同大学の『青少年科技博覧』誌4月号掲載の、中国科学院院士、科学院物理研究所研究員何祚庥が執筆した「私

は青少年が気功を行うのに賛成しない」という論文の中で、3ヶ所にわたって法輪功に言及したのに対し法輪功学習者が抗議して、座り込みを行った。人数は当日の数十人から、25日には5000余人に達した。それまでの座り込みの中で数人ないし数十人が公安当局に連行、拘留された⁽⁵⁷⁾。

4月25日、朝早くから、一万人を超える法輪功の学習者が、北京の党と政府所在地である中南海の北と西の街路に集合してこれを包囲した。主として、天津、河北、山東、遼寧、及び北京から集まったもので、1989年の天安門事件以来最大の大衆的民間集合となった。

参加者は、事前に定められた場所に陣取って、あるいは座り、あるいは立ち、本を見るか私語を交わして、スローガンを叫ぶ等の騒ぎは起こさず、しかし武装警察の解散勧告にも耳を貸さなかった。年齢は中高年が多く、在職幹部、軍人、レイオフ労働者、退職した労働者、公務員や軍人もいた。労働者、農民、知識人もいた。

このように、事前の配置が整い、交渉の代表が事前に選定されていたことから、この動員が決して管理のゆるい組織のなし得るところではないことは明らかであった。

朱鎔基首相は、午前と午後の2回にわたってこの請願デモの十人の代表と会見した。朱首相は気功による健身運動に対しては干渉し、禁止したことはなく、異なった見方や意見は正常なルートで上申すべきである、と強調、党中央と国务院の所在機関を包囲するこのようなやり方は完全に間違っていると指摘した⁽⁵⁸⁾。

請願者代表は、次の3点の要求を出した。①天津で拘留されている法輪功学習者を直ちに釈放すること。②法輪功関連の著作の公開出版を許し、法輪功に活動の場所を提供すること。政府は法輪功に合法的地位を与えること。③何祚庥問題を厳しく処分すること。これに対して政府は、天津公安部による拘留者を釈放させ、他の問題には三日以内に返答すると約束した⁽⁵⁹⁾。

夜10時ころ、各地方から迎いの車がきて、参加者は、11時過ぎには全部退散した。

同日夜、江沢民総書記は、党中央政治局員及び関係者に向けて手紙を書いた。主な内容は次のとおりであった。

「今日の事件は私達が深く考慮するに値するものだ。まったく知らない間に党と国家権力の中心の入り口周辺に一万余人が集まって、一日中取り囲んだ。その組織規律の厳密さと情報伝達の迅速さは、まったくまれに見るものだ。これに対してわれわれの関係部門は、まったく気づかなかった。しかしインターネットでは法輪功の各地の組織連絡系統はすぐに探すことが出来るのだ。これは深い反省を促すものではないのか？

私は、この種の組織がすでに全国組織を形成し、かなりの多くの黨員、幹部、知識人、軍人及び労働者農民の社会的グループがかかわっているというのに、警戒し気づくのが大いに遅れたことに、深く心を痛めている。関係する地方と部門は、この事件から経験と教訓を引き出し、一をもって十を知るようにしなければならない。各級指導幹部、とりわけ高級幹部は目を覚ますべきである。この事件が海外、西側と連携があるかどうか、バックで『やり手』が画策指揮をとっているか大いに警戒心を高めるべきだ。共産黨員は唯物論、無神論を信奉しているというのに、法輪功がもちあげているあんなものに打ち勝てないとしたら、天下の笑い話になってしまうではないか⁽⁶⁰⁾！」。

4月27日、孫玉璽外交部副報道局長が法輪功問題で記者会見した。心身修練法である気功についてはこれまでに禁止したことはない。25日には国務院の関係責任者がこの問題に関する意見聴取と説得工作に当たった、と述べる。

同日、中共中央、国務院弁公室の上訴局（信訪局）責任者が、新華社記者の取材に答え、当局は気功学習活動を禁止していない、しかし「武術などの修行に名を借りて社会の安定に危害を及ぼすものは、法によって処分する」

と述べた。

4月30日、李洪志がシドニー入りした。当地で『亜洲週刊』誌の取材に応じ、法輪功創始者として中南海事件への直接的関係を否定した。

6月2日、李洪志が「私の感想」を発表した。最近マスコミに中國大陸が対米貿易黒字5億ドルを減らすのと引き換えに李洪志を帰国させようとしていると報道されているとし、これに対して意見を述べたもの。最後に、法輪功学習者は一億人おり、一万人はほんのわずかでしかない。不公正な処遇の下で、学習者がまだどれだけ耐えられるかわからない。これは私が最も心配していることだ、と述べた。⁽⁶¹⁾

6月7日、香港各紙が、法輪功学習者集団が第二次示威行動に移り、6日までに北京を退去させられた学習者は、7万人に達した、と報道した。

同日、江沢民総書記は中央政治局会議で、次のような重要談話を行った。

「もし党の思想政治工作、組織工作、大衆工作が新しい情勢について行けず、社会生活の新しい変化に適応できなければ、党の指導を強化改善することは不可能である。流れるに任せ、耳を閉ざしていたのでは実際上は党の指導の放棄である。過去の古いやり方、古い方式、古い調子を簡単に繰り返しているならば、實際を離れてマルクス主義を宣伝し党の方針政策を宣伝することになり、よい効果を収められないばかりか、はなはだしくは反対の効果を生むことになる。もし党の思想政治工作、組織工作、宣伝工作、大衆工作が軟弱散漫な状態にあるならば、各種の唯心論、有神論、非マルクス主義、はなはだしくは反マルクス主義のものが、機に乗じて一種の傾向、一種の思潮を形成し、われわれの思想政治陣地、大衆陣地を占領し、氾濫して災害を起こすことになる。⁽⁶²⁾」

6月14日、新華社報道。中共中央弁公室、国务院弁公室上訴局責任者が、法輪功上訴者に対応したときの談話要点は次の通りであった。

① 連日、一部法輪功修練者が次々とうわさを流して、「公安機関は練功

者に対して鎮圧を行った」「党・団員、幹部が練功に参加すれば党（団）籍と公職を辞任させられる」「中国は5億米ドルの貿易黒字を抛出して、x x xを引き渡させ、帰国させようとしている」等々と述べている。これはまったく無から出た話で、人心を惑わすデマである。警戒心を高めて、是非を明らかにし、こうしたデマに惑わされてはならない。

② 党と政府の正常な練功健身活動に対する態度はすでに十分に明らかにされている。

2) 非合法組織として取締りを開始

6月30日、中共中央組織部と中央宣伝部が、「党员、幹部の中で、マルクス主義唯物論と無神論教育を深く展開することに関する通知」を出し、7月10日には、中共中央弁公庁が「関連文書学習を組織する事に関する通知」を出す。いずれも非公開の指示であった。⁽⁶³⁾

7月19日、「中共中央の共产党员が『法輪大法』を修練してはならないことに関する通知」発出される。李洪志及びその「法輪大法」を暴露批判することは厳粛な政治闘争である、と述べる。⁽⁶⁴⁾

同日夜から、20日未明にかけて、中国各地で法輪功幹部の一斉摘発が行われる。

7月22日、中国民政部が「法輪大法研究会取締りに関する決定」を通知。

法輪大法研究会は法に基づく登記をしておらず、かつ非合法活動を行い、迷信邪説を宣伝し、大衆を騙し、事件を挑発し引き起こし、社会の安定を破壊したことが明らかとなった。よって『社会团体登記管理条例』の関連規定に基づき、法輪大法研究会とその操縦する法輪功組織を非合法組織と認定し、これを取締ることを決定した。

同日、中国公安部が次のように通告した。法輪大法（法輪功）関連の宣伝活動、刊行物、ビデオ等の販売、配布を禁止し、集団の修練、集会、デモ等を禁止する。

同日、新聞、テレビ等で、法輪功と李洪志に関する一斉批判が開始された。

7月29日、公安部が李洪志を国際指名手配した。公安部スポークスマンによれば、李洪志が、法輪功組織を通じて迷信邪説を宣伝し、人を死亡させたこと、法輪功組織が法による申請と許可なく、集会、デモ、大衆集合等により、公共秩序をかく乱した行動は、「刑法」290条、296条、300条の規定に違反する⁽⁶⁵⁾。

8月24日、新華社報道。近日党中央弁公室、国務院弁公室が「政策の限界を厳密に掌握して大多数の“法輪功”修練者の転化離脱工作をさらに推し進めよう」という通知を出す。

10月15日、新華社報道。国務院弁公庁が近日「人事部と監察部の、国家公務員が“法輪大法”を修練する事等の問題に関する若干の処理意見」を通知した。一般気功学習者、非合法集会参加者、同関与者、同画策・組織者等に対するそれぞれ異なった組織処分方式を指示し、国有企業においてもこれを準用するとした。

3) 邪教組織として取締りへ

10月30日、全人代9期常務委員会第12回会議が、「邪教組織の取締り、邪教活動の防止と処罰に関する決定」を行った。

その内容は、①法により邪教組織を断固取締り、邪教組織の各種犯罪活動を厳しく処罰する。②騙された大多数の大衆を団結させ、教育し、ごく少数の犯罪分子を厳しく処罰する。③公民の中で、憲法と法律の宣伝教育を展開し、科学文化知識を普及する。④邪教活動の防止と処分においては、社会を挙げて取り組む、となっている。

この「決定」に基づき、最高人民法院と最高人民検察院は、「邪教組織を組織、利用した犯罪案件における法律具体応用処理の若干の問題に関する解釈」を決定し、10月30日に施行した⁽⁶⁶⁾。

これは、「刑法」第300条の、「会道門、邪教組織を組織し利用し、あるい

は迷信を利用して国家の法律、行政法規の実施を破壊したものは3年以上7年以下の有期懲役に処す。同他人を騙し、死亡させた者は前項の規定により処罰する。同婦女を姦淫し、財物を騙し取ったものは、それぞれ236条と266条規定にのっとり罪定、処罰する」という規定について、具体的法解釈を定めたものである。

「邪教組織」とは、宗教、気功その他の名義を騙り設立し、首領を神格化し、迷信邪説を利用、製造、散布する等の手段により他人を惑わし騙し、メンバーを拡大しコントロールし、社会に危害を与える、非合法組織である、と規定された。法輪功は邪教のあらゆる重要な特徴を備えており、正真正銘の邪教であるという⁽⁶⁷⁾。

海南省海口市中级人民法院は、11月12日、法輪功の中核分子宋岳勝、陳元、江詩龍、梁玉琳に対してそれぞれ有期懲役の一審判決を行った。彼らは、7月から9月まで13回の非合法集会を行い、8月1日から9月18日まで、全国で非合法集会活動を行ったことが、罪状とされた。

12月16日、北京市第一中级人民法院は、法輪功組織の中核分子である、李昌、王治文、紀烈武、姚潔に対して、それぞれ18年、16年、12年、7年、の有期懲役刑判決を言い渡した。かれらは、10月19日に逮捕状が執行されていたが、法輪功組織の中では、直接李洪志を補佐して、組織の発展を図り、300人以上の包囲デモを78回起こし、4月25日の事件も直接指揮した。さらに、出版物等の不法収益、メンバーの不正常死、国家情報の窃取にもかかわったとされる。

今年1月6日には、空軍指揮学院教授于長新（74歳）が軍事法廷の秘密裁判で17年の懲役刑を言い渡された。

アメリカに居る法輪功創始者李洪志を除いて、国内で中央の最高指揮部メンバーの法的処分が決まったことから、地方組織メンバーに対する法的処分も急速に進む事になると見て良い。

4) 批判・暴露・取締り展開のプロセスの特色

法輪功学習者による共産党と政府の中樞中南海包囲事件により、法輪功組織に対する対策は、党、政府の重大な課題となった。しかも、1999年は、6月が天安門事件10周年に当たり、10月1日は建国50周年、さらに12月20日はマカオ返還と、重大政治課題が目白押しであり、したがって、政治の安定は1999年の最大の課題であった。

政治安定の決め手は、国内における民主派の組織的拡大と全国組織化とを防止することにあると見られており、法輪功の中南海包囲事件はこのような政府の対策の死角をついた形でおこった。さらに、5月7日には、駐ユーゴ中国大使館へのNATO軍によるミサイル攻撃事件が発生、さらに7月9日には李登輝台湾総統の「特殊二国論」の表明があり、台湾海峡でも緊張状況が生じた。

5～6月には、党と政府を挙げて法輪功についての情報が集められ分析が行なわれた。ある中央への報告では、次のような結論が示されたという。法輪功は、自らを「仏教上乘、大法修練」と称し、大いに宇宙の最高特性である「真善忍」と同化することを根本とし、宇宙の転変の原理にしたがって大法大道を修練する事になっている。しかし、実質的に、法輪功は、仏教、道教のいくらかの観点を混ぜ合わせて歪曲利用し、かつ各種の封建迷信、巫功邪術、民間宗教邪説、はなはだしくは会道門とつき合わせ練り合わせた雑炊であり、完全に反唯物論、反科学、反社会、反現実、反歴史のでたらめたわごとである。⁽⁶⁸⁾

7月19日には、「中共中央の共産党員が“法輪大法”を修練してはならないことに関する通知」が出されて、法輪功活動分子の拘留が始まった。22日午後から、テレビ、ラジオはいっせいに法輪功批判番組を流し始め、新聞雑誌でも法輪功批判一色と成り、これが約1ヶ月続けられた。8月25日に『人民日報』は「大多数を教育し、大多数を団結し、大多数を離脱させる」

という社説を發表し、キャンペーンは終了した。9月は主として建国50周年の国慶節準備に当てられた。

10月15日から批判が再開され、30日には全人代常務委員会が「邪教組織の取締り、邪教活動の防止と処罰に関する決定」を行った。この「決定」を基礎にして邪教活動の定義と法解釈の基準が示された。これにより11月には海口市で、12月には北京で中心的活動家に対する中級法院の一審判決が行われ、法的処理が進んだ。

（5）中国共産党への試練

1）中国共産党政権にとっての法輪功の危険性

中国共産党と政府が、本格的に法輪功の暴露、批判、取締りに乗り出すに当たって、1999年7月19日に、「中共中央の共産党員が“法輪大法”を修練してはならない事に関する通知」を出した。この通知を公表した『人民日報』は7月23日に、「認識を高め、危害を見極め、政策を把握し、安定を維持しよう」という社説を發表して、法輪功の危険性について、次のように述べた。

法輪功問題の処理と解決に当っては、まず「法輪功」組織の政治的本質と重大な危険性についてはっきりと認識しなければならない。李洪志は「法輪功」組織を通じて極力彼の編造した「法輪大法」を宣伝し持ち上げ、人心を惑わし、大衆を愚弄している。精神的に練功者を操縦し、「地球が爆発」し「末日が到来」する、ただ法輪功修練者のみが「災いを避けて避難でき」、「天国へ済度してくれる」等の歪理邪説を吹聴しているだけでなく、組織上のコントロールを進め、力をいれて全国組織機構を発展させ、大衆を争奪し、さらにわれわれの一部の党政機関と枢要部門に入り込み、われわれの党と政府と対抗する政治勢力と成るべく発展を図っている。彼らのやり方に賛成しない人、彼らのもたらす危険性を暴露しようとする人に対して、彼らは非難

攻撃し、包囲攻撃し、報道機関を攻撃し、党政機関を騒がせ、さらには大規模な非合法集合活動を組織し党と政府に威力を示し圧力をかけた。

中国共産党の危機意識は、法輪功が党と政府に対抗する政治勢力になろうとしている、という言いかたに表現されている。4月25日には、党、政府の感知しない間に1万人を超える人達を全国から動員する事が出来たということに対するショックが反映している。

法輪功の側では、普及活動の合法性が失われたので、来る人は拒まず、去るのも自由という形で、会費も安く修練所を維持する「無組織の組織」であることを強調していた。4.25事件が起こるまでは、当局側から見て法輪功の中核組織がとらえにくかったといえる。

そして、法輪功組織の党内中枢部への浸透は、かなり深刻なものとなっていた。7月19日に重点省、市党委書記会議が開かれて、政治局常務委員李嵐清を組長とし、書記処書記羅幹、丁関根を副組長とする中央「法輪功」処置専門小組が設置されて、同日晚に取締りの手配が決められた。しかし、翌日にはすでに法輪功組織が知るところとなり、地方の書記がまだ帰りつかないうちに、15の省で省政府が修練者に包囲されることになったのである。⁽⁶⁹⁾

地方の例では、安徽省合肥市の法輪功による抗議署名者のほとんどが高級幹部、高級知識人で、半分以上が党員であるという。⁽⁷⁰⁾5月はじめには、老紅軍、老党员である軍301医院（解放軍総医院）の元院長の李其華が、党中央に上申書を書いて、有識者は法輪功を早く修練すべきだと述べたという。⁽⁷¹⁾5月7日党中央規律検査委員会法規室幹部の王友群が1万語にも及ぶ公開書簡を書いて、法輪功と4.25事件を擁護した。⁽⁷²⁾

2) 徹底的な李洪志批判

中国共産党は、こうした一種の組織の機能マヒに至る可能性のある危機に対して、文化大革命での批判闘争の形態を利用して、徹底的な批判を開始した。

李洪志は1993年に書かれた個人の略歴の中で次のように述べている。「本人は1951年5月13日に吉林省公主嶺市に生まれ、幼少から仏家全覚大師により個人的に修練の法門を伝授され始め、8歳の時に修練は完了した。」
 「12歳の時に道家師父八極真人が私を探し出して道家の功夫を伝授した。」
 「1972年には真道子と道号する師父から大道所学を伝授された。」
 「1974年にはまた仏家師父により修練大法を伝授され、これは山を出るまで続いた」。
 法輪功組織が編集した『李洪志先生簡介』はまた次のように述べている。
 「李洪志は8歳で上乘大法を会得して、大いに神通力を備え、搬運、定物、思惟控制、隱身等の機能を持ち、……功力は極めて高次元に達し、宇宙の真理を悟り、人生を洞察し、人類の過去、未来を予知するに至った。」

以上は公安部研究室論文によるものであるが、同論文は、「こうした荒唐無稽な“神話と奇跡”が多くの“法輪功”学習者を騙した」と論断する⁽⁷³⁾。

中国のマスコミは、李洪志の身内、友人、近所の人、同僚、上司、気功の初期の協力者等に徹底的に取材して、こうした「神話と奇跡」がでたらめである事をこと細かく暴露した。

若干の例を取り上げてみたい。法輪功では、病気は前世の業を返す過程であるとして、医者にかかることを好ましくないとした。これについて、李洪志自身が盲腸の手術を受けている事、また、李家では、本人も含めて医者通いが多く薬の費用が巨額である事が暴露された⁽⁷⁴⁾。

李洪志の神通力について聞かれた母親は、立腹して、「小来子（李洪志の幼名）はでたらめを言い、でっち上げを言い、人を騙しているのだ！あなた方は彼のでたらめを聞くべきではない。私は彼の成長を逐一見てきたが、もし何か功があれば、私も李家であんなひどい目にあわなかっただろうに」と述べた⁽⁷⁵⁾。

小学校でラッパを教えた杜先生は、李洪志は音感も悪く記憶力も良くなかったと述べ、長春市糧油供給会社の同僚は、彼の教養のレベルが低く、同僚と

のそりが悪かったとのべ、友人は、李洪志は奥さんの李瑞との夫婦仲が悪く、けんかが絶えなかったとのべた。⁽⁷⁶⁾

組織面では、李洪志は、法輪功は分散管理を行っていると述べていたが、実は組織は非常に厳密で、4.25事件以降は、第一線指導部が逮捕される事に備えて、第二線、第三線指導部の配置を進めていた。⁽⁷⁷⁾また、将来の発展に備えて河北省懷来県に大伽藍を備えた「法輪研修センター」を建設すべく手配を進めていた。⁽⁷⁸⁾

3) 批判・取締りと教育・援助

批判・取締り、中核活動分子の処分と並行して、一般の学習者に対する教育・援助が行われた。

7月19日の、「中共中央の“法輪大法”を修練してはならないことに関する通知」は、法輪功学習者に関する、批判、暴露、取締り、さらに学習者に対して、教祖李洪志との中核グループとの絶縁を実現させる方法と段取りについて、明確に指示した。この「通知」は党員に関するものであるが、一般の学習者にも適用されるものであった。

第一は、法輪功組織の政治的本質と重大な危険性を十分に認識し、思想を中央委員会の精神と統一させる事である。

第二は、法輪功問題について、集中的に学習教育を展開する事である。学習教育活動は、学習により認識を高める事、教育により立場を転換させる事、組織における処理の3段階に分け、全党内で統一的に進める。

第三は、法輪功修練者の転化の活動をうまく行うことである。先ず大多数の修練者に自覚を高めて態度を変え、思想的に一線を画し組織関係を絶たせる。それぞれの修練者の態度により、きめこまかに組織的処理を進める。

第四は、各級党組織が指導を強化し、政治責任を取る事である。旗幟鮮明に、断固とした態度を取ると同時に、方法に注意して矛盾を激化することを防ぐことが強調された。

報道によれば、7月末に河北省邯鄲市では、6000余人の修練者が法輪功との決裂を表明した。⁽⁷⁹⁾ 8月下旬、党中央弁公室と国務院弁公室は、ほとんどの法輪功修練者が、法輪功組織から離脱し、今後活動に加わらない事を表明した、と述べ、政策の線引きを厳格に把握して大多数の法輪功修練者の教育転化と離脱活動をさらにうまく進めるよう指示した。⁽⁸⁰⁾ ここでは、大多数を教育し、団結させ、転化し、離脱させ、ごく少数を孤立させ打撃を与えることが強調された。⁽⁸¹⁾

10月中旬には、人事部と監察部が「国家公務員が“法輪大法”を修練する等の若干の問題に関する処理意見」を通達し、国家公務員でも党に準じた処理を進めることを指示した。またこの処理意見は国有企業でも参照すべきだとした。⁽⁸²⁾

10月30日の邪教組織取締りに関する決定が採択されて以降も、ごく少数の李洪志のために喜んで殉死したい頑固分子は、口をすっぱくしての説得にも耳を貸さず、まだ意識的に政府に対抗している、として、彼らには法律により厳しい制裁を加えるべきだ、とした。⁽⁸³⁾

吉林省では、法輪功修練者への教育、転化、離脱工作について党と政府の各級で指導者責任制を実行し、一時納得が行かない修練者に対しては、職場、家庭、町内会、派出所の四位一体請け負い責任制を取り、責任書を作成して、取り組んだ。⁽⁸⁴⁾ 大学では、教師と家庭が手をとって説得に当たり、黨員に対しては入党紹介者が説得に当たった。⁽⁸⁵⁾

12月までに吉林省の1万名近い元法輪功練習者のうち96.9%が立場を変え、138名の県以上の修練所の責任者が立場を変えたとされる。⁽⁸⁶⁾

注

- (1) 中国の気功そのものの発展については本稿では扱う余裕がなかった。この問題についてはさしあたり、津村喬『気功への道』創元社1990年、馬濟人『中国気功学』東洋学術出版社1990年、を参照されたい
- (2) 張洪林『還気功本来面目』中国社会科学出版社1996年 pp7-8
- (3) 津村喬『気功への道』創元社1990年 p115
- (4) 張洪林『還気功本来面目』中国社会科学出版社1996年 pp6-9
- (5) 本節は、主として申漳『天惑—特異功能与気功探秘』華夏出版社1997年 pp69-74、による
- (6) 経緯、艾人編著『嚴新気功的哲理与修練』海天出版社1998年 p433
- (7) 申漳『天惑—特異功能与気功探秘』華夏出版社1997年 pp1-4
- (8) 同上 pp5-9,
- (9) 同上 pp5-6
- (10) 同上 pp23-24
- (11) 同上 pp24-26
- (12) 同上 pp26-28
- (13) 于光遠『反「人体特異効能」論』貴州人民出版社1996年 p1
- (14) 同上 pp3-124
- (15) 申漳『天惑—特異功能与気功探秘』華夏出版社1997 p21
- (16) 于光遠「讓事实說話」(何祚庥主編『偽科学再曝光』中国社会科学出版社1999年所収)
- (17) 全文、何祚庥主編『偽科学再曝光』中国社会科学出版社1999年 pp343-4
- (18) 錢学森、吳明諭、于光遠の手紙の全文は、何祚庥主編『偽科学再曝光』中国社会科学出版社1999年 pp348-352 参照
- (19) 何祚庥主編『偽科学再曝光』中国社会科学出版社1999年 p356
- (20) 経緯、艾人編著『嚴新気功的哲理与修練』海天出版社1998年 p82
- (21) 同上 p478
- (22) 張微晴、喬公『法輪功創始人李洪志評伝』明鏡出版社1999年 p79
- (23) 『人民日報』1994年12月14日
- (24) 何祚庥主編『偽科学再曝光』中国社会科学出版社1999年 p89
- (25) 龔育之論文、何祚庥主編『偽科学再曝光』中国社会科学出版社1999年 pp 1-35
- (26) 申漳『天惑—特異功能与気功探秘』華夏出版社1997 p28

- (27) 何祚庥『我不信邪－何祚庥反偽科学論戰集』江西出版社 1999 p13
- (28) 陳星橋編著『仏教“気功”与法輪功』宗教文化出版社1998 pp185-7
- (29) 『新時期宗教攻策文献選編』宗教文化出版社 1995 年 pp53-73
- (30) 鍾科文『“法輪功” 何以得勢－気功与特異功能解析』当代中国出版社 1999 年 pp60-62
- (31) 本項は、慧明編著『不鳴驚人－気功大師方宗驊伝奇』四川人民出版社 1999 年、による
- (32) 何祚庥主編『偽科学再曝光』中国社会科学出版社 1999 年 p223
- (33) 申漳『天惑－特異功能与気功探秘』華夏出版社 1997 pp6-8
- (34) 何祚庥主編『偽科学再曝光』中国社会科学出版社 1999 年 pp223-224
- (35) 何祚庥主編『偽科学曝光』中国社会科学出版社 1996 年 pp162-166
- (36) 申漳『天惑－特異功能与気功探秘』華夏出版社 1997 年 pp29-39
- (37) 鍾科文『“法輪功” 何以得勢－気功与特異功能解析』当代中国出版社 1999 年 pp336-350、何祚庥主編『偽科学再曝光』中国社会科学出版社 1999 年 pp219-223
- (38) 本節は主として次によっている。経緯、艾人編著『敵新気功的哲理与修練』海天出版社1998年、鍾科文『“法輪功” 何以得勢－気功与特異功能解析』当代中国出版社 1999 年 pp255-263、何祚庥主編『偽科学再曝光』中国社会科学出版社 1999 年 pp213-215、張洪林『還気功本来面目』中国社会科学出版社 1996 年 pp45-67、何祚庥主編『偽科学曝光』中国社会科学出版社 1996 年 pp191-207
- (39) 本項は、主として、何祚庥主編『偽科学再曝光』中国社会科学出版社 1999 年 pp215-219、229-246、鍾科文『“法輪功” 何以得勢－気功与特異功能解析』当代中国出版社 1999 年 pp364-393、司馬南『神功内幕』中国社会科学出版社 1998 年 pp305-357による
- (40) 本項は、主として柯雲路『發現黄帝内經』上下、作家出版社 1998 年、司馬南、李力研『太乙宮黒幕』中国社会科学出版社 1998 年、李衛華、劉偉亜『追踪到公審－胡万林事件採訪内幕』河南人民出版社 1999 年による
- (41) 本項は、主として何祚庥主編『偽科学再曝光』中国社会科学出版社 1999 年 pp197-212、李力研『重大紀実－司馬南還活着』1998 年 pp18-68、による
- (42) 本項は、西安供電局智悟気功研究会『中国香功』陝西科学技術出版社 1992 年、『中国香功教程』陝西科学技術出版社 1994 年による
- (43) 「王兆国の各民主党派等の人士への報告要旨」『人民日報』1999 年 7 月 24

日

- (44) 第2章及び公月論文『北京之春』1999年6月号 p36を参照
- (45) 李慎明論文『瞭望』1999年34号 pp6-8
- (46) 『亜洲週刊』1999年5月3日-5月9日 p20
- (47) 『半月談』1999年16号 p10
- (48) VCD『法輪功大起底』今日中国出版社音像部出版発行 1999年
- (49) 公安部研究室「李洪志其人其事」『人民日報』1999年7月23日
- (50) 張微晴、喬公著『法輪功創始人李洪志評伝』明鏡出版社1999年 P77
- (51) 公安部研究室論文、前出
- (52) 前出『法輪功創始人李洪志評伝』p122
- (53) 鄧衛編著『転不動の法輪』経済日報出版社 1999年 p59
- (54) 前出『法輪功創始人李洪志評伝』P105
- (55) 同p132
- (56) 『亜洲週刊』1999年5月3日-5月9日 pp21-24
- (57) 『亜洲週刊』1999年5月3日-5月9日 p20
- (58) 鄒蕪「話說『法輪功』」『鏡報』1999年7月号
- (59) 『亜洲週刊』99年5月3日-5月9日 p20
- (60) 鄒蕪論文『鏡報』1999年7月号
- (61) 『前哨』1999年7月号
- (62) 中共中央文献研究室、中共中央編訳室編『馬克思、恩格斯、列寧、斯大林、毛沢東、鄧小平、江沢民論唯物論和無神論』中央文献出版社1999年p82
- (63) 『馬克思主義唯物論和無神論教育學習材料』中共中央党校出版社1999年8月 5~10ページ
- (64) 新華社1999年7月22日
- (65) 新華社1999年7月29日
- (66) 『人民日報』1999年10月31日
- (67) 本報評論員『人民日報』1999年10月31日
- (68) 華楚、鍾漢著『法輪功風暴』太平洋世紀出版社 1999年 p131
- (69) 野潭論文『鏡報』月刊1999年9月号 p40、『亜洲週刊』1999年8月2日-8月8日 p19
- (70) 『前哨』月刊 1999年9月号 p16
- (71) 前掲、野潭論文 p39
- (72) 全文、前出『法輪功風暴』 pp249-264
- (73) 「李洪志其人其事」『人民日報』1999年7月23日

- (74) 『経済日報』1999年8月4日、『半月談』1999年16号 p9
- (75) 「李洪志真実面目尋踪〈之四〉」『吉林日報』1999年8月21日（中共中央
宣伝部出版局編『真相与思考』学習出版社1999年所収 p138）
- (76) 同上『真相与思考』p104,p105,pp125-6
- (77) 新華社1999年8月5日、『人民日報』1999年11月1日
- (78) 同上『真相与思考』p93,p121
- (79) 新華社1999年7月27日
- (80) 新華社1999年8月24日
- (81) 社説『人民日報』1999年8月25日
- (82) 新華社1999年10月15日
- (83) 評論員『経済日報』1999年11月11日
- (84) 『経済日報』1999年11月22日
- (85) 『人民日報』1999年11月24日
- (86) 『人民日報』1999年12月6日